

第30期社会教育委員の会議

第3回定例会

議事録

令和4年9月6日

【１】開催日時

令和４年９月６日（火）１８時３０分～２０時３０分

【２】開催場所

教育会館３階 研修室「ぎんが」

【３】出席委員

井上委員（議長）、堀井委員（副議長）、峯岸委員、奥平委員、豊田委員、
村上委員、村内委員、佐藤委員、新海委員、山崎委員

【４】出席職員

教育委員会事務局

内田生涯学習部長、加野生涯学習・地域学校連携課長

佐々木社会教育係長、御園生社会教育担当係長、清野社会教育係主任

【５】傍聴人

無し

【６】次第

１ 第２回議事録の承認

２ 議事

（１）グループワークⅡ～持続可能な活動とは～

３ その他

（１）次回日程について

○議長 皆さん、こんばんは。定刻になりましたので、第30期社会教育委員の会議第3回定例会を開催したいと思います。

それでは、本日の議事日程に従って進めてまいります。

まず、第2回議事録案の承認でございます。事務局より事前に皆様のもとに送付されておりますので、御確認をいただいていると思いますが、何か訂正等が必要な箇所はございますでしょうか。大丈夫ですかね。では、承認をお願いしたいと思います。ありがとうございます。

それでは、この会議の終了後、豊田委員と村上委員に署名をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。あわせて、今回の議事録の署名については、村内委員と佐藤委員をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、修正の有無にかかわらず、後日、事務局から完成版を配付していただくことになっておりますので、どうぞお読みください。

続いて、議事に移りますが、その前におわびと訂正がございます。事務局から皆さんへの開催通知には、グループワークの振り返りやシンポジウムについての御案内があったと思いますが、スケジュールを再調整したほうがいいのではないかと直前に事務局と相談いたしました。皆様にお諮りしたいと思います。その理由は、11月のシンポジウムをする場合に、渡部教育長が急遽別の公務が入ってしまったのと、それともう一つ、これも副議長とも相談したのですが、11月にシンポジウムをするのはちょっと早いかなという感触を持っておりますので、事務局にはスケジュールの再調整ということで、もう少しゆとりを持って再検討していただくというふうをお願いをしたところでございます。スケジュールが決まり次第、皆さんにお諮りしたいと思います。

今日は、お伝えした内容を少し修正いたしまして、前回、グループワークを2つのグループを分けて委員と委員にお聞きしたのですが、今日は、前回お話しいただくはずで御都合により欠席されてしまいました委員と委員に、同じように活動についてお話をいただきながら、検討をしていきたいと思っております。いかがでしょうか。

では、時間の関係もありますので、早速グループワークを前回と同じようにしたいと思います。よろしくお願いいたします。グループについては、資料4で事務局から提案いただきました。お願いします。

○事務局 今、議長からも御説明がありましたけれども、本日は急遽内容を変更させていただく形で、前回同様、グループワークを考えてございます。そのグループAとしては、

おやじの会の事例を、そしてグループBでは、総合型地域スポーツクラブということで、よろしくお願いいたします。

資料4のグループ別の下の検討事項というところで、基本的には5つの検討事項を中心に、それぞれの事例を基に話し合っていたきたいと思っておりますが、特に、「なぜうまくいっているのか」、「いっていないのか」、そういう要因等々をぜひ深掘りをしていただきたい。ただ単にあの人がいるからというだけではなくて、そこにはいろんな何かがあるんだろうと思っておりますので、「なぜうまくいっているのか」、「いかないのか」、あるいは「持続可能な活動にするために必要なものは何か」というのを、深掘りをしていく。ということで、なぜ、どうしてという追求みたいなことが、今後、シンポジウムとかワークショップをやる上で大変参考になってくるのではないかとと思っておりますので、ぜひ意識しながら、グループワークを進めていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○議長 前回もAグループ、Bグループに分かれて少人数でそれぞれの活動の内容、ポイントとなるような事柄について理解を深めていったわけですが、今回もおやじの会と総合型地域スポーツクラブについて、2つに分かれて、今ポイントを幾つか述べていただきましたが、それに即しながら検討を深めていきたいと思っております。

では、早速2つに分かれて、その際、また戻すようになるんですかね。

○事務局 そうですね。19時50分を目安に各グループ発表という形ですので、50分前になりましたら、またこの形になっていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○議長 発表者をあらかじめ決めておくを書いてありますね。

○事務局 そうですね。またそれぞれのグループで。それで全体での意見交換をしたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○議長 分かりました。では、よろしくお願いいたします。

〔グループA：おやじの会〕

○議長 では、早速ですけれども、よろしくお願いいたします。

○委員 オール世田谷おやじの会の会長をやっています。よろしくお願いいたします。

前回、私欠席して、今来て前回の議事録を見させてもらったのですけれども、内容を見ると非常に共通項が多い気がします。オール世田谷の資料として、ホームページを印刷し

てもらっているのがあるんですけども、会の概要、趣旨だったり活動ということでしょう、基本的に世田谷には小学校が61校、中学校を入れると90校ある。その各校におやじの会という組織がある。PTAというとは大体お母さんが主体になっていたり、PTA会長はお父さんのパターンもありますけれども、ただ、ふだん活動している方はほぼお母さん方が多いんじゃないかと思いますけれども、PTAの立場的にはその一環、保護者ということなんですけれども、お父さんたちだけが集まって子どもたちのイベントをいろいろやろうという組織が60ぐらい、ほぼあると思っていいぐらいあります。そのお父さんたちの組織が極めて属人的というか、学校の中のお父さんグループの中で活動していて、横のつながりがないし、PTA連合会があつたりというわけではないので、お父さんたちの取りまとめだったり意見交換をする場所がないので、それを今、オール世田谷おやじの会がやっているという形になっています。私自身は小学校のおやじの会をやっていたんですけども、そこからオール世田谷おやじの会という会を知りまして、今、会長をやっています。

おやじの会自体は何をやっているかという、基本的には、昨今、10年、15年ぐらいだと思ふんですけども、子どもたちの教育だったりいろいろなことに関わりたいという教育熱心なお父さんたちが増えてきていて、お母さん任せじゃなくてお父さんだからこそこできるようなことはないだろうかということを意欲的にみんなでやっていこうよというお父さんたちが集まっているのがおやじの会で、それぞれの組織でいろんなイベントをやったりとかを実際しています。

例えば簡単な例でいくと、この間、情報交換会で出ていたのは、ナイトウォークといって羽田まで夜中、子どもたちと一緒に保護者が歩いていく。夜中出歩いちゃ駄目だという環境で、子どもたちだけだと当然駄目だと思ふんですけども、大人と一緒に夜中歩いて帰ってくるという、それだけなんですけれども、これが非常に盛り上がっていたりとか、子どもたちにとってみると、異次元体験とふだん経験したことのないような体験ができたという話だったり、一言で言うと体験的なものが多いですね。雪合戦とか、お父さんが面白いと思うようなことを子どもたちに体験させたいと言って、子どもたちと一緒にそういうイベントをいろいろやっているというのがおやじの会としては多いですね。オール世田谷では、情報共有という形で、各小学校でどういうことをしていますかとか、何か問題はないですかとか、どういうことで悩んでいますかみたいな話をすると、ふだんはおやじの会の中だけで固まっていろいろイベントをやっているの、話を聞いてみると横串で見え、悩みがほぼ共通しているんですね。それを、ほかの学校ではこうやって解決しましたよと

か、ほかはこんなことをやっていますよとか、イベントにしても、そんなイベントができるんだったら、うちの学校もやってみたいというイベントに対するノウハウを共有するというようなことで情報交換会をすると非常に喜ばれるというか、より地域の活動としてお父さんたちの活動が活発になっているという形です。

その情報交換会が1つオール世田谷としては大きいんですけども、あと、お父さんたちの結束を強めるというか、盛り上がってもらうためにソフトボール大会とフットサル大会をやっています。キーワードは1つで、「チームの連携を強めるためには共通の敵をつくれればいい」、共通の対抗相手がいれば、そのチームの中は一致団結して、それに向かって頑張るぞ、オーとなるので、それが一番分かりやすいのがスポーツです。そういう意味でソフトボールとフットサル大会をやっていて、これも非常に盛り上がっています。これはお父さんたちだけのチームで、お父さんたちが試合に出てきて戦うんですけども、これも地域内の結束を高めるという意味では非常に重要なイベントだと思っています。

あと、9月に今度やるんですけども、もう一つ大きいのが、おやじと子どもフェスタというイベントをやっています。これがブラスバンドだったり、ダンスだったりとか、いろいろな子どもたちの活動しているチームがありますけれども、このチームの発表の場を世田谷区民会館でやっていたんですけども、今改修しているのでできないので、今年は成城ホールでやりますけれども、子どもたちの発表の場をつくろうということで、おやじと子どもフェスタというイベントをやっています。基本的には今コロナ禍なので子どもたちの発表しかできないですけども、世田谷区民会館でやっていたときは、お父さんが屋台を出して焼きそばとか、いわゆる縁日であるような屋台を出して、子どもたちの発表の場のホールの外で店舗を構えてイベントを盛り上げるというのをやってもらっています。各小学校のおやじの会が、屋台を出してもらうというのをやっていたけれども、今コロナ禍で、改修があって場所が確保できないというのがあってできていないんですけども、今年は発表の場ということでやっていますというのが、ほぼオール世田谷の活動です。

先ほど申し上げたように、第2回の資料を見ていて共通しているなと思ったのは、「うまくいっている要因は何か」というのは、いろんなおやじの会の話を聞いていると、まず自主的であるということです。やらされていない。自分たちがやりたいからやっているという極めてバイタリティーある意欲的なお父さんたちが本当にこんなにいるのかというぐらいいろんな活動をしているというのが非常に共通しているんじゃないかと思います。

あと、結局、イベントをやったときに達成感があるということだったり、イベントが面

白い。僕自身もやっていて思いましたけれども、お父さんたちはいろんな組織で仕事をしています、いろんな人が集まっているので、今度イベントをやりたいんだけどという話を打合せでしていると、「こういう仕事をしているから、それサポートできるよ」みたいな、「そんなのあり？」みたいなことが次々と起こったりするんですね。いろんな人が集まって意欲的にやると、やらされていないので、「その部分はやるよ。自分だったらこんなことができるし、あの業者に頼めばきっとできるよ」みたいなことが次々と起こって、普通お金をかけてやろうと思ったら労力とお金が幾らかかるか分からないけど、自分たち結構やるじゃんみたいな達成感が一番大きいかなと思います。

だから、そこで自主的にやっているということと、イベント自体が面白い。内容が面白いもそうなんですけれども、そこに行くまでの過程が面白いというのが、みんなをやる気にさせる。仕組みでやっているわけじゃないので、本当に偶然的なところが多いんですけれども、そういうことが次々と起こって面白いと思ってやっているところは多いですね。

あと、びっくりするという意味では、僕がやっていたときにありましたけれども、みんなそれぞれ仕事を持って忙しいので、資料を作ってくださいだったり、みんなに配る案内を作ってくださいとかといって仕事を振るんですけれども、ふだん仕事しているから、夜中の2時とかに送ってきたりするんですよね。そういうのを見て、「2時にこの資料を作っているの?」、「会社の仕事が終わったのが12時なんで、そこから1時間かけて作りました」とやってくると、こっちは感動するんですよね。「そこまでしなくていいんじゃないの。だったら言ってよ。誰かに振ってよ」とかいうことも起こると、1人ずつのそういう前向きな気持ちが伝播してくるんです。あんなに頑張っているから、じゃあ自分ももっと頑張ってみようとかと、どんどんプラスの相乗効果が伝播して行って、どんどん会が盛り上がり、よりイベントが成功する。それが一番うまくいくパターンだと思います。

あと、先ほどの資料の中にもありましたけれども、まず、おやじの会の一番いいところは、自分たちが意欲的にやっているの、やらされていないんだけど、スピード感。こういうことやりたい、面白そうだからやろうよといったときに、それがとんとんとんとんと思ったとおりにできる。これがある一定の形の組織だったり、PTAもそうかもしれないんですけれども、いろんな人がいろんなことを言ってきて、結局イベントが潰されてしまったり、そういうリスクがあるからやめようよみたいになりがちなんですけれども、これがなぜできるかというと、コアメンバーが大抵少ない。五、六人なんですね。何やろうかだったり、会を運営するコアスタッフは非常に少人数なんですけど、ただ、それが少人数で勝

手に決められているのが見えるについてこないんですね。自分がいなくたって、別にあなたたちが勝手にやってくれるだけでしょうと見えちゃうと、それ以外の人は完全に自分たちはお手伝いになっちゃって、お手伝いになると主体的にならないので、主体的にやってもらうためには、今度こういうふうなことをやりたいんだけど、どうですかという、常に何かを決めるときに、みんなで決めましょう。誰かが決めるのではなくて、みんなの意見を出し合いながら決めましょうというのが非常に大事ですね。そういう話が前回の2回目のところにあったと思いますけれども、誰かが責任を取るというのは誰も文句を言わないんですけど、何かをしようといったときに、いろいろ揉んだ後に、いやいやいや、もうこれでいくんだ、オーみたいにやられると一気に引いちゃう。自分がいなくたって別にいいんじゃない？という主体性を失う非常に大きな要因になってしまうので、そういうやり方は多分うまくいかないだろう。

少人数の話合いの中でかじ取りはするんだけど、最終決定はみんなでしょう、その場でみんなで決めていこうという、全員が主体的に関わっていると、そうでなくてもいいんですけども、そう見せないとなかなか長く続かないという気がします。

「うまくいっていない」ところは、さっき言った典型的なやられている感です。よくあるのは、去年こういうことをやったから今年もこういうことをやりましょう。去年こういうふうにして、当然、去年やっているノウハウがあるので、そのとおりにやりましょうというのは、イベントとしては簡単なんですけれども、そればかりやっていると、自分たちが考えてやらなくていいので、楽は楽なんですけれども、イベントとしては面白くないんですよね。現役の今やっている人たちが、今度こういうことをやってみようよとか、こういうことをやったら面白いんじゃないか、そのためにはどういうことが必要で、何を用意しなきゃいけないかという作り上げていく感がないと、ただ、去年こういうことをやって非常に評価が高かったから、それを今年もやることにします。何が必要です。あなたは何をしてください。はいはいはいはい。イベントは成功しましたというだけをやっていると、多分続かない。面白くないから、主体的に自分たちが関わっていないから。ただお手伝いで役割分担をして、役割を増やされて、そのイベントをやっているだけになると面白くないと続かないという気がします。

この辺で1回切っていいですか。その後もいろいろ話すことはいっぱいあるんですけども、今の話の中で何か御意見があれば。

○議長 今、おやじの会というものがどういうものをしていて、おやじの会の中心メン

バーから見たおやじの会のほかと比べてうまくいっている理由をお話いただきましたが、何か気になることとか、もう少し聞いてみたいこととかありませんか。委員は御自身がされているわけですが、ぶんか村は、今のお話を聞いて共通するところとか、いかがですか。

○委員 とても羨ましかった。お父さんが考えるスケールの大きさだったり、そういうのが子どもたちに響いていくんだろな。お母さん目線だと、安全とか、もうちょっと教育的なこととかになりがちなんですけれども、ナイトウォークする、ああ、いいなと思いました。お父さんの発想を私たちももっと取り入れなきゃいけないなと逆に今考えていました。

○委員 多分お母さんたちでやると危ないから、夜中に子どもと一緒に歩くなんて、事故が起こったらどうするんだとか、何かトラブルがあったらどうする、自分たちでは見切れないからできませんで終わっちゃう気がしますよね。

○委員 異次元を楽しんだという子どもたちが、本当に楽しかったらろなと想像ができます。

○委員 おやじの会としては、子どもたちにそういうことはやってあげたいと思っているんですね。危ないかもしれないけど、そのためにどうすればいいか。イベント自体を体験したいというのはそうなんですけれども、子どもたちにそういうことを教えたいというか、さっきのフェスタの話も、コロナ禍で2年間ともやったんです。最初の1年目も、コロナは訳が分からないから、当然リスクもあるから、ほぼいろんな団体がイベントを中止する中で、おやじの会としても、やはりいろんな感染リスクを考えたら中止にしましょうと最初は思っていたんですけれども、中止にするのはすごく簡単だけど、これをやるとなったら今までのイベントの1.5倍、倍ぐらい大変になるんだけれども、コロナ禍でイベントがあることの子どもたちにとっての意味は、きっと倍どころじゃないよね。イベントがなくなっているんで、ここでイベントをやったら、子どもたちがすごく覚えておいてくれるんじゃないかという思いもあって、あえてやったんですね。感染症対策は、一般的なことですけれども、名簿を提出くださいだったり、接触が少なくなるように完全に入れ替えにしましょうだったり、当然イベントの規模としてはコロナの前にやったのよりはるかに縮小しなきゃいけなかったんですけれども、感染リスクが高いから、当然、ブラスバンドとか吹奏楽部の子どもたちは出てこないんですよ。ダンスだったり、人と接触しても時間が限られているチームは出てきてくれて、吹奏楽部などがいなくなった分、参加団体が少なく

なって、完全入れ替えでも1日で回ることが結果的にできたんです。あえてそういうことをやることによって、これから先、子どもたちにとって、コロナだけではなくいろんな困難がやってくる可能性は当然あるんだけど、そのときに諦めないでチャレンジして何とかできないかということを子どもたちに知ってほしいというメッセージだと言って格好よく挨拶しているんですけれども、そういうところも踏まえて、おやじとして子どもたちに何を伝えたいか、どういうふうなことを今後教訓としてやっていってほしいかというメッセージだと言ってやっています。

○議長 校長としてどうですか。今のお話を伺いますと、PTAでもおやじの会が学校ごとにあるところもあると思うんですけれども。

○委員 すごくよく分かる。うちもおやじの会に助けられているんですけれども、今お話ししていた中で、そうだよなと一番思ったのは、いろんな専門家が集まっているんですね。だから機動力がいいというか、うちで言うとお医者さんがいたりすると、コロナがあっても医学的なこういう根拠でこうだから、こういう対策を取ることにしようみたいなものを、さっき夜中に仕事をしているという話があって、恐らくそのお父さんも夜中にこんな立派な冊子を作ってきて、学校の教員たちは絶対に用意できないような専門家の御意見として、お医者さんがついているからやっても大丈夫みたいな、学校を超えたところにあるようなメンバーなんですよ。いろんな人のパワーが直接生かせるのがおやじの会なんだと今聞いて思ったんですね。それがうまくいっている秘訣は、意欲的になっている。決めるときにみんなで決めたというのがあるから、お手伝い的な発想じゃなく関わっていくところがあるんだと。

PTA活動と逆ですよ。PTAはどっちかという義務的にというか、うちはちょっと違うけど、学校によってはポイント制にしたりとか、必ずやらなくちゃいけないものというふうにして駆り出すじゃないですか。そうすると途端にやりたくなる。でも、おやじの会はそういうのではなくというところが、その組織の魅力なんだな。

それともう一つお聞きしたいんですけど、うちのおやじの会の人たちは、学校のことで何かあったら何でも手伝いますと言うんです。何でもと言っても、イベントをしたいというのとも違って、奉仕的な作業をしますよと言うんですよ。この間も夏の暑い盛りにお言葉に甘えてと言って、いつも甘えてばかりで、草取りを頼んだんですけれども、その機動力が、やっぱりおやじなので、集まった人数の割に教員の1人当たり3倍以上の働きがあるんじゃないかなという感じで、何でもやりますよに甘えて毎度毎度お願いしているん

です。

○委員 雪かきのときもすごかったという話を聞いたことがあります。

○委員 そうなんですね。何でもやりますよというふうに言うてくださる、そのかき立てるのはどこから来るのか。単に自分の子どもがお世話になっているからだけではあんなにならないよねというのがあって、それで見返りを求めているわけでもなく、その行為自体を熱中してやって、終わった後に、本来だったら、議事録に残せないかもしれないけれども、飲み会でありがとうございますができるんだけれども、そういうのも今ないじゃないですか。ただお疲れさまと言って、こういうお茶がちょっと配られるだけ。それだけで休みの日の貴重な3時間とか4時間とかをおやじの会の人学校にくれる。なぜそこまでやってくださるのか。

○委員 自己達成感ですね。

○議長 今言われたことはすごく分かるんですけど、校長が言われたのは、非常に意地悪な言い方ですけども、ほかでも達成感のある場所であったり承認欲求を達成される場所があったりすれば、その人の専門性が生かせる場所がほかにあれば、何もおやじの会でなくてもいいかもしれないと思うんですね。でも、お父さんたちは仕事のほかに、おやじの会に惹かれるわけですよね。それはなぜなんですかね。

○委員 それは先ほども申し上げたように、やっぱり子どもと関わりたい、子どもに自分の姿を見せたいだったり、そういう意識が出てきているのがすごく大きいと思います。その中で自分は何ができるだろうかと考えたときに、学校のイベントだったり、例で言うと、平日の場合、夜、雪が降ると、校門の前に行ってみんなで雪かきをするんです。朝、子どもたちが雪かきされた校門の前を見ると、わあ一っとなるじゃないですか、先生たちはすごく喜ぶ。子どもたちが転ばないで安全に行ける、先生たちはとっても喜ぶ姿を夢見て、夜中、雪をかくんです。自分はこれで役に立っているんだという達成感です。

○議長 ということは、自分が役に立っているとしても、自分の子どもというのが非常に大きなポイントなんですかね。子どもに見せたい。

○委員 最初は子どもから入るんですけど、だんだんいろいろやっていくと、自分の子どもがいなくてもイベントを手伝ったりとか、だんだん広がっていくんですね。最初は子どもと一緒に何かをしたい、今言ったようにいろんな体験をさせてあげたいといったところから、今度はこんなイベントをやろうよということになるんですけども、そのイベントに自分の子どもが参加しなくても全く変わりませんという形で、いろんなサポートをして

くれたり、手伝ってくれる。おやじの会で一番困るのは、やったことによって非難される。

「何でこんなことをやってんだ」だったり、一番怖いのは事故ですね。やったことによってみんなから非難されるようなことがあると、これはみんな引いてしまいます。自己目標達成意欲が自分の中で、別に飲み会があって言われるわけじゃないんだけど、いや、これは絶対みんな喜んでくれるよなという思いは非常に大きいと思います。

○議長 最初は自分の子どもがいて、それに関わる。その子どもが卒業しちゃってもそのまま関わっていて、自分が役に立ちたいというのはすごくよく分かるんですけども、今いろんな人と出会ったり、自分でできることをするというのが学校ぐらいになっちゃっている感じがあるんですけども、学校以外にはそういう場所はないですかね。

○委員 地区委員とかの組織だったり、今回のこういう会だったりとかも、おやじの会目線でいうと、先ほども言ったようにおやじの会は属人ベースのそれぞれの勝手にやっている組織ばかりなので、そんなことをやっているんだということを知らないと思います。児童館に行ったら、イベントのときにいろんなものを貸してくれるというのをオール世田谷でも言っているんですけども、おやじたちはそういうことも知らないと思います。自分たちで何とかできないかといったときに、児童館に鍋とかを置いているから、それを借りてくればいいんだよと言うと、ああ、そうなんだみたいな、そういうレベルなんです。それぐらい横の連携がないので、僕たちはそういう連携をしようというふうな情報交換会とかをやっているんで、教育委員会がこういうことを考えているというのもそうですけれども、そんなことをおやじは全然知らないし、僕も大分こういうことに関わるようになって、こういう立場で、こういう位置になって、やっと分かりかけてきたというレベルで、そうなんだ、もっと宣伝しようよというのはすごく思います。

○議長 そうすると、一番身近に関わりやすいところから始まったのが、その方たちにとってのおやじの会ということで、ちょっと変な言い方ですけども、もしかしたら、ほかの人にとってはおやじの会じゃないようなもの、それと同じようなことがあれば、そこでも関わっていく。

○委員 できると思います。

○議長 そういうことですね。

○委員 やはりおやじの会に入る人は自主的なんですよ。子どものために何かをやろうというおやじがいて、それが集まっているんです。例えば、もう子どもは卒業してかなりたちまして、今はOB会じゃないんですけども、OBの別団体として、現役のおやじの

会とは全然違う組織として小学校に関わっているのですが、例えば運動会のときに、我々のときもそうですし、今コロナで運動会はできないのですが、子どもたちが終わってテントがいろいろありますよね。運動会の後、片づけをしましょう。自主的におやじの会の方々がやっている。声をかけるんですが、やはり人数が少ないので、見に来ているお父さんがいるので、お父さん方、一緒になって手伝ってくださいと言っても手伝わないおやじがかなりいます。その差ですよ。おやじの会がうまくいくというのは、自主的に子どもために何かしよう、小学校のために何かしようというお父さん方が多いか少ないか。

あと、波があると思うんですね。その年によっておやじの会に興味のあるお父さんが集まる年もあれば、やはり何年かはそんな関係ないよというおやじもいる。だから、人数が増えるときがあれば、少なくなって存続は難しい。そのうちだんだんまた増えてくる。それは不思議なんですよ。やはり自主的に何かやりたいという人たちがたまたま集まる時期は、それはさっき言われたとおり、今はおやじの会のお話をしているので、例ですが、小学校以外にお父さん方が集まって子どもたちとという機会はちょっと今ない。例えばおやじバンドとかがあって、おやじの会じゃなくて、そういう趣味のお父さんがたまたま出会ってといっても、接点が少ないかもしれない。

○議長 それこそ昭和の初めみたいに古くなると地域の子ども会とかはあったと思うんですけれども、その頃はおやじの会という言い方はあまりなかったと思うんですけれども、今はそういうのはないですよ。

○委員 今はどこの学校でも、日本全国、おやじの会は結構注目を浴びていますし、オール世田谷でも一生懸命やられている中で、おやじの会はPTAじゃないんだよということの位置づけで、興味あるお父さんがちょっとやってみようかな。当然、友達同士のおお母さんがまず仲よくなって、その延長上でお父さんというのが多いんじゃないかな。

○議長 お聞きしたいんですけれども、今、波があるんじゃないかとか、お母さんを経由してとか、学校へのアクセスでそういう話がちょっと出ていましたけれども、「メンバーの入れ替わりや新規メンバーのリクルート」とか、あるいは中核になっている人がだんだん年齢が上がってくると、子どもが卒業していくに従って今度新しい人がというところがどの組織でも、うまくいっていらっしゃるけれども、結構そういう問題があるという話でしたけれども、そのあたりについてお話しいただけますか。

○委員 これはおやじの会の情報交換会をやっていると必ず出てくる悩みなんですよ。リクルート、新人勧誘、どうすればいいか。コアメンバーでやっていたんだけど、卒業

しちゃってやってくれる人がいないという話がよく出てくるんですけども、僕の今までいろんな話を聞いていた結論は、おやじの会が活動をしているのに、それ以外のおやじは、やっているのを見ていても全く関わろうとしない。そのことはとてもよくあるんですけども、壁があって、1個壁を乗り越えたら、去年あっち側にいた手伝わなかったおやじが、今年はこっち側にいる。こっちで勧誘しているみたいなことはよく起こり得て、この壁は何かというと、「あなたが必要だ」なんですよね。個別にあなたに協力してほしい。そこに「キーマンの存在と役割とは」とありますけれども、これが最大のキーマンの役目なんですけれども、あなたが必要だ、誰でもいいわけじゃないんだ、あなたなんだという、それが結局自己達成感というか、自分か、誰でもよくてじゃなくて、自分なんだというのはすごく大事で、それを感じてくれると、全然関係ない素通りしていた人たちがこっち側に入ってくるということが起こり得るんですね。

僕がオール世田谷でよく言っているのは、まず、こういう会をしていること知ってもらうこと。これを「網かけ」と言っているんですけど、おやじの会がこんな活動をしていますよ、この団体はボランティアなんだけど、こんなことをやってみんなに喜んでもらっていますよということを知ってもらうことは当然とても大事です。その次に、多分その知ってもらうときにパンフレットを配ったりとか、メールを登録してもらって、今度こんなイベントがあるので手伝ってくださいと全員にccとかでメール連絡するじゃないですか。それは当然やるんですけど、その後に、あんたに来てほしいと個別にメールを出すんですよ。極端なことを言ったら、全員にメールを出した後に、目をつけておいて知っている人に個別メールをそれぞれ出せと。結局、全員網かけして一本釣りなんです。釣りと一緒になんです。餌をまいておいて、そこで一本釣りする。この釣れる1本が超大物がかかったりすると、その人がどんどん声かけるから、ばさっと連携して入ってくるんですね。そういうのがリクルートで、結局一番の有効手段です。

オール世田谷でも3月に情報交換会をやるんですけども、なぜかということ、必ずみんなの悩みとして、リクルート、新人勧誘が出てくるから、春の入学式の前、入学式でまずおやじの会の説明をする機会をもらってください。校長先生にお願いしてください。PTAが挨拶することはあると思うんですけども、PTAの後におやじの会の時間をもらってください。それは網かけという意味で大事なんですけれども、そこでここ何年か出てきて、これいいねという案が、保護者と一緒に来て校門で入学式の写真を撮る。その保護者が校門の前に並びますよね。この並ぶのをおやじの会が管理するんです。「こっちに並んで

ください。写真撮りますよ」で写真を撮るんです。おやじの会のワッペンをつけて何も言わないんですよ。管理して、「みんなこちらに並んでください。順番ですから」と言って「写真を撮りますよ」と写真を撮ってあげると、めっちゃ喜ばれるんですね。学校も喜ぶし、特にコロナだといろいろ接触があったりとか、ごったになったりとかして、校門の前に人がわっとなったりするのは学校としても嫌じゃないですか。これがちゃんと整理されて、写真を撮る方としても、誰かに頼まなくても勝手に写真を撮ってくれるというのをやると、入学式で、おやじの会って何か活動しているの？　そういえば校門の前で写真を撮っている人たちはおやじの会のワッペンをつけていたねみたいな、これは効果てきめんです。そういう各おやじの会がやっているノウハウ共有があるんですけども、こういうふうになると、去年は20人ぐらい新人が入りましたという、「うおー、やった。よかったね」という話になったりしますね。

波があるとおっしゃったのが、そのとおりです。これはリーダー次第なんですよ。キーマンがそういうことを分かって意欲的にやっているのと、そうでないで、ただお手伝い感だけだと、お手伝い感だけで最初はどんどん集まっても引いていっちゃうんですけど、キーマンが気を配って意見調整したり、誰かが決めているわけじゃなくて、みんなで決めてやっていきましょうよというふうにやっていたり、もう一つ「キーマンの役割」とありますけれども、率先した自己負担なんですよ。自らやりますよ。みんなボランティアでやっているんで負荷だよ。いろんな資料を作るのも面倒くさいし、手間がかかるよね。「いいいいよ、自分やるよ。作ってみんな配っておくから、あとはこれ頼む」みたいな、そうすると、あの人があれだけ頑張っているんだったら、ちょっと自分も頑張ろうかなみたいなものを引き出す力がキーマンの役目なんですよ。でも、キーマンが全部やっちゃうと全体を管理する人がいないので、基本的には細かな作業だったりいろんな負担はいろんな人に振って、みんなにいろんなことを頼んでいるから、最後は自分が責任を取るから、みんなよろしくねというのが一番うまくいくパターンじゃないかと思います。

○議長　今のはオール世田谷の会の話と個々のおやじの会の話が混在しているような気がしたんですけども、今のお話は個々のおやじの会での話。

○委員　同じです。

○議長　個々のおやじの会の話でもそうだし、オール世田谷はそのおやじの会をさらにうまくノウハウを共有したり、情報を共有したりする。

○委員　オール世田谷という組織自体は、おやじの会とは違って、オール世田谷がやって

いるイベントのスポーツ大会だったりフェスタだったり、オール世田谷の基盤となっている学校はないので、学校とは関係ないんです。ただ、いろんなおやじの会の代表が出てきて情報交換会をするじゃないですか。今年もそうだったんですけども、「すごいな。何でそんなことができるんだ」みたいなのをオール世田谷に引っ張るんです。そのノウハウをオール世田谷として共有してくれと言って引っ張る。そういう人たちは各おやじの会のリーダー格で、バイタリティーと意欲が高いので、オール世田谷はそれで盛り上がる。

○議長 ちょっと誤解していたんですけども、基本的に学校単位の会のことをおやじの会といい、そしてオール世田谷は、そういうおやじの会の人全部入るわけじゃなくて、おやじの会の中の……。

○委員 そうです。情報交換の場で、オール世田谷のメンバーは何人いるんですかと言われると困るんですけど、情報交換会として参加してくれる人は、もしかしたら100人とかいるかもしれないんですけど、さっき言ったコアメンバーは7人で、7人が決めて、こういうふうにしましょうとってみんなに協力を要請する。スポーツ大会も7人ぐらいで回せるので、実際に協力を要請することはあまりないんですけども、ただ、各団体の参加するおやじの会も、ソフトボール、フットサルをやりたいとしようがないおやじばかりだから協力してくれるんですよ。こういうふうな仕組みでこういうふうにするから、後はよろしくねというふうにやると、試合の運営だったり、そういうのを全部各チームでやってくれる。だから、オール世田谷は、時間と場所の制約があるから、それは駄目ですとかという仕切り役なだけで、実際の運営は各チームがやっているのが実情です。

○議長 おやじの会は各学校でやっている会みたいなことがイメージとしてはあったわけですね。そのおやじの会の情報交換をしたり、さらにオール世田谷おやじの会でやっているイベントもある。そのオール世田谷おやじの会のやっているイベントは、各学校のおやじの会の人参加するという形でやっているわけで、オール世田谷おやじの会のコアメンバーは7人ぐらいということですね。

一旦ここまででけりをつけて、何かお聞きになりたいことはありますか。

○委員 現役のおやじの会の人たちと年齢差がかなりあるじゃないですか。今お話を聞いていて、昔のことはどうだったかといっても、もう全然違うじゃないですか。今聞いていて、新しいお父さん方が教育の場にすごく関心があって、まず教育を中心に小学校に溶け込んでいきたい。その中におやじの会があって、おやじの会を通じて物を見たいと同時に、新しいお父さんのグループ、仲間ができて、子どもを通じた友人ができて、小学校の

ためにおやじとして何ができるのか。力仕事はできる。そういう形で交流が増えていくというのは、基本的には昔と一緒にだなというイメージなんですけれども、我々のときは力仕事から入っていったというイメージなんです。教育というよりも、運動会がある、何かのイベントがある、僕らが先生に代わってテントを運び出したり何をやるよというイメージだったのですが、さっきのお話からすると、教育に関心があるお父さん方も、当然昔ながらに力仕事をやるよ、いろんなお手伝いをするという人もいるでしょうけれども、それプラス子どもに対する教育に対してすごく関心がある。また、親として、ボランティアとして子どもたちの教育の一つの担い手になりたいんだという人たちも新たに入ってきている。そこで若い人たちも年齢層が違ってきているというのが今のお話の中で見えてきましたね。

そうすると、そういうことを生かすことによって、おやじもだんだん入りやすくなるし、新しいお父さん方のおやじの会というものの見方が変わってくるんだなというイメージは、我々が平成4年ぐらいから立ち上がってという話から始まりますと、大体我々のちょっと上の人たちなんですよ。そこから始まって、我々が入っていたのは平成10年そこそこ。ちらほらおやじの会ができ始めてきたかなというところで参加していたものですから、今はもう当たり前のように、皆さん、おやじの会と言っても通じます。私がおやじの会の会長をやっていたときにオール世田谷はあったんですが、私は参加しないほうだったんです。

「え、何、オール世田谷。おやじの会を仕事が忙しい中でやっているのに、何で世田谷中のおやじの会が集って何がある。個々でいいじゃない。自分たちの満足でいいじゃないか」といって参加しない派だった。誘われまして1回だけ行ったのかな。話を聞いて、情報交換までいかなかったですよ。まだ皆さんが立ち上がって集まってきて、自分たちの活動内容を言っているのかな。

○委員 追加負担に感じるんですよ。

○委員 今は分からないですけども、その当時はですね。

○議長 小学校の低学年のお父さんはとても若いわけですよ。でも、そういうお父さんであつても、力仕事だったら女性よりできるとか、自分も子どもにお父さんの姿を見せたいというのは、多分どの世代でも共通していますけれども、もしかしたら今のほうがそういうお父さんが増えてきたかなという感じはしています。

それプラス、そういうお父さんもオール世田谷おやじの会に関わっていくと、非常に若いお父さんが世代のちょっと上のいろんなことをされているお父さんに会って行って、

これは面白いことをしているなとか、だから自分の居場所を見つけたり、あんな人たちがいるのは会社とは違うなとか思ったりするような何かがあるんじゃないかと思うんですけども、そのあたり、いかがですか。一生懸命やっても、そこだけでもう十分じゃないか。昔はそうでしょうけれども、そこまでいいんじゃない？という人がいても不思議ではない。でも、オール世田谷のところだと、やっぱり魅力あるなというか、楽しい活動だなと思っている人たちがいるわけですね。その辺は何なんでしょうね。

○委員 それはオール世田谷がということですか。

○議長 おやじの会に関わっていったり、オール世田谷に関わっていく人たち。若い人もいらっしゃるわけですね。

○委員 いますね。年はあまり関係なくて、逆にスポーツ大会とかやっていると、若いお父さんのほうが動けるんで重宝するんですよね。僕の感覚としては上下10歳ぐらいは同期みたいな、それは子どものおやじの会をやっているから、余計そうだと思いますけど、上10歳、下10歳ぐらいは同じ年感覚で接しているというのは、すごくあります。年はあまり関係ないかなという気はしているんですけども、それも結局、おやじの会は自分たちでいろいろやっていて、オール世田谷に行く必要がないというのは、中で盛り上がってればそれでいいんですけど、ただ、オール世田谷に出てくるような親たちは、さっき言った校門で写真を撮るとか、ナイトウォークの話とか、こんなことをできるよ、ほかの学校でやったから、それはできると思うよだったり、どうやって校長先生を説得するんですかとか、みんなにどうやって告知するんですかとか、ノウハウを持っている人たちが、こういうふうにやったから、こういうふうにやったらきっとできるよだったり、さっきの児童館の話もそうですけれども、児童館は鍋とかを持っているから、そういうところへ借りにあればいいんだよというような自分たちが活動する上でのノウハウ共有や、メリットだったり、行ってよかったとか聞いてよかったという話になると、どんどん入ってきてくれる。最初はそういうふうに思われることがすごく多いですよ。おやじの会をボランティアでやっていて、それでもう手いっぱいなのに、オール世田谷とって、また何かやらなきゃいけないかったり、自分を割くこと自体があまり意味がないんじゃないかと思われる団体も結構あります。でも、別にそれはそれで独自でうまくやっていけばいいんじゃないですかと思って、ボランティアなので当然強要はしません。

○委員 オール世田谷に私は行かない派だったんですが、それはもう初期の段階で、こんないろんなイベント事はなかった時代なんですね。本当に運動会のお手伝いや花火大会で、

校外でやっていたのを、おやじが校庭を使って少し大きめの花火大会をやろうじゃないかとか、そのぐらいの、まだノウハウやアイデアがない時代で、おやじの会にPTAから予算をあげようかというぐらい言われていた本当の初期の段階だったので、それが今は全く違いますからね。

○委員　そういうふうにおっしゃるおやじの会の代表は結構いますよ。オール世田谷なんて、そんな時間ないよ。

○委員　今現在もですか。

○委員　いますよ。追加負担に感じるんですね。

○議長　そういう個々の学校のおやじの会でどうしたらいいんだろうと思っていたんだけど、オール世田谷に行っているいろんな人の話を聞くと、なるほどその手があったかというのは分かるんですけども、単にそういううまい手があったというだけじゃない気がするんですよ。そういううまい手があるということを知りたいだけだったらほかにも方法がありそうな気がするんですけど、オール世田谷おやじの会の方々と関わっていく上での楽しさというか、単にノウハウや、いい手があったと教えてもらうということ以上の楽しさみたいなのはどこにあるんでしょうか。

○委員　この間情報交換会を、去年まではZ o o mの会議で、役員は教育委員会の会議室にいて、コアメンバーが五、六人そこにいて、あとのおやじの会はZ o o mでアクセスしてくださいとやっていたんですけども、今年は一步進めたいということで、リアルで会議をするんだけど、そこに外からネットでアクセスもできる両方のハイブリッドでイベントとしてやりました。そこで、会議をどこでやるかという話をしていて、感染症リスクがあるから校外がいいんじゃないの、公園とかがいいんじゃないのという話で、次大夫堀公園とか駒沢公園からネットで入ってきてもらう、それが面白いといったところから始まったんです。事務局もオール世田谷をサポートしてくれて、そういうネットの会議を代官屋敷でやったことがあるらしいよという話を聞いて、代官屋敷の古民家の中でおやじの会の代表を集めて、いっぱい入らないように人数を制限して、それ以外はネットで入ってくださいというような情報交換会の形にしたんですけども、これはめっちゃ盛り上がりましたね。そんなことは誰もやったことがないから、ハイブリッドというだけでもどうしようかという世界だったのに、それを代官屋敷からやるのか、めっちゃ格好よくないかというので、オール世田谷がそれを仕切ったんですけども、オール世田谷の役員はみんな盛り上がりましたね。

このどきどきするような新しいことを達成すること、やってみようぜといってやってみること、これが原動力になっている気がしますね。

一番分かりやすいのは屋台とかで、自分は焼きそばを焼きたいとか、やれと言っていないのに言ってくるおやじとかは結構いっぱいいるし、今、フェスタで屋台を出せないんですけど、屋台をどうするといったときに、焼きそばとかは誰でも簡単に考えつくんだけど、射的をやってみたいとか、要するに昔自分たちが経験した縁日をイメージして、「ヨーヨー釣りとかは簡単だよな」とか、「こんなことをやってみると面白いんだよな」、「それってやったことある?」、「ないないない」、「どうやってやっていくか、ちょっと考えてよ」みたいな、チャレンジすること、新しいことをやってみること、これが面白さに原点になっている気がしますね。

○議長 それでちょっと分かりました。別に飲み会があるわけではない。

○委員 飲み会は打合せの後にやったりしますけれども、飲み会ベースではないですね。やっていることがどきどきするな、面白いなみたいなことを、いかにやるか。

○議長 どきどきすることは、子どもとか学校とかと関わらせることがいつも出てくるんですか。それは必ずしもそうではないですか。

○委員 必ずしもそうじゃないですね。

○議長 そうすると、僕なりのイメージで言うと、多分会社とかほかのところでは事業ベースになるからできないけれども、そういう全てのものから自由になって、場合によっては学校とか子どものためみたいなことからさえも自由になって、やりたいことを仲間と一緒に、10歳ぐらいの年齢差があっても、小学5年生の親といたら10歳ぐらい差があったりしますよね。そういう意味では、自分の中学のように1年先輩だと先輩とかいうんじゃないくて、ある程度幅を持って、そこで出会った人たちが所属しているものを超えていろいろやりたいことを思い出して、試してみてというようなところがあると理解していいんですかね。

○委員 そうですね。最初は子ども基点で入ってきたりするんですけども、仲間意識というか、一緒に苦労する仲間で何かを成功させて、その成功させた暁に、みんながこれは絶対喜ぶよな。喜んでいる姿が目浮かぶというのがおやじの会の活動力、バイタリティーの原点になっている気がします。

コロナ禍で活動できていないというおやじの会と、その真逆で、その中でも何とかして何かイベントをしようというところと2つに分かれるんですけども、何とかしようとい

う団体は何をしているのかというと、おやじたちはネットでZ o o mの会議をやっていますけれども、自分たちは仕事上Z o o mを使ったりしているので、そこでクイズ大会とかをやっているんですよね。そんなのできるのかと思ったのは、例えばしりとりで、「り」と言ったら、「り」のつく物を持ってこいと言って、パソコンの画面の前に「り」のつく家の中にあるものを探してくるんですよ。「りんご」となるじゃないですか。そしたら、次は「ご」のつくものを探してこいと言って、家の中で「ご」のつく物を探してくるんです。それをどんどんしりとりみたいにつなげていくと、超シンプルなんですけど、めっちゃ盛り上がるんですね。いろんなことを考えるなど。Z o o mだったり、今ネットを使ってコミュニケーションを取ろうというのが出てきたので、そのツールを使ってこんなイベントをやりましたというのが出てきたりとかしますね。

例えば、子どもということだと運動会が中止だったり、保護者の人数制限入れたりという形で、学校側はこのコロナ禍で運営をしたと思うんですけど、おやじたちが自分たちのカメラで運動会の様子を撮って、それをネットで教室に放送するとか、リアルタイムで流すとか、これを業者に頼んだら100万ぐらいかかるんじゃないかみたいなことを、これは自分たちでやりましたという話だったりとか、何でもできるんだね、君たちはという話とか、結構いろいろ出てきて、この間の情報交換会も面白かったです。その1つがナイトウォークだったりするんですけども、そんなのできるんだ。

○議長 何となく少し秘密が見えてきたような感じで、僕なりに整理すると、何かのときには子どものため、学校のためということと運動会をやったり、入学式とかのお手伝いもするけれども、それだけをやっているわけじゃなくて、自由にいろんなことを楽しんでいる、イメージ的には、何となく高校とか中学の仲間が集まっているような感じなんだけれども、同じ中学校の同級生ですと、恐らくいろんなことで人生が見えてきたときに、いつまでも友達でいられなかったりということがありますよね。分かりやすく言うと、受験だったり、就職だったりして差が出たり、でも、そういうのは家庭を持って子どもができているときに、一旦もう超えていますから、今さら別に職場の名前で競ったりとか、どの仕事に行くんだなんてことは関係ないし、どんな仕事だってみんなそれなりにやって、一定の年齢になると、どこを卒業したなんて関係なくなるので、そういったこととは別に新しい関係性の中で、しりとりなんて面白いんですよね。ある意味、ばかばかしいものであっても、それを楽しめるような仲間と一緒にやってみたら、すごく面白いということで、その場でルールをつくっていくわけですね。「ご」だったら「ご」を探してこようみたいにやっ

ている。そういうふうなつながりの中で、じゃ、ナイトウォークをやろうかといったときに、ナイトウォークということでできたり、仮に災害があったときには、そういう仲間です。そういうアイデアと行動力で、3.11みたいなことがあったら、何かの形で活動されていくというふうなことなんでしょうか。

○委員　そうですね。ホームページにも書きましたが、これは最大の防災訓練だと思っています。地域の周りにいるおやじたちで連携して何かイベントをやる。まさにそれは防災訓練だと。それぞれ役割分担して、あなたはこういうふうに動けみたいな、イベント自体がそういう訓練をしているというふうに訴えて、おやじの会という地域のコミュニティを活性化させたいし、いろんなところでもやってほしいというのをホームページの挨拶に書いてあります。今までの僕らの前の世代は組織のサラリーマンで、その中での完結で、地域にあまり関わりを持たないお父さんたちがいて、どちらかというと、その分はお母さんが主体になって、よろしくねみたいな、うちの親の世代とかはそうでしたけれども、そうではないよねというふうにどんどん変えていかないと、震災をすごく言っていますけれども、地域に震災とかがあったときに一緒に連携して何かをするという訓練を誰もしていないし、おやじの会ぐらいしかその機会はありませんよというふうに僕は言っていますね。

いろいろ地区委員会もあるんですけど、もっとそういういろんな活動を地域のおやじたちを集めて一緒にやれば、いろんな地域の問題が解決できるんじゃないかと思っています。

おやじの会として、もう一つ悩みとして出てくるのは、おやじの会の現役であるときは、一緒に仲間同士でいろいろやるんですけども、子どもが卒業すると、ぱかんとなくなるんですよ。一生懸命やっていたおやじであればあるほど、自分はどうすればいいんだみたいな、おやじの会ロスになるんですね。それを受皿がない。それをぜひ地域の中につくったほうがいいと思うんですけども、自分の地域のおやじたちの連携も、その仲間というくくりもあるんだから、これを何か地域活動だったり、そういうところに移行して、今度はこっちで頑張ってくださいという枠組をつくれればいいのにと長年思っています。

○委員　私の場合は、おやじの会が終わって本当に長い友人ができたんですね。子どもが卒業して、ぱっと終わりじゃ嫌だね、残念だね。かといって現役のおやじの会と関わっちゃうと、おやじって結構癖がある人が多かったので、現役潰しになったら嫌だねということで、OBはOBなんですけれども、OB会じゃないんです。本当にそのときに仲のいいおやじたちが集まって学校に対しておやじの会以外に、例えばおやじの会は校内のことを

やるんだったら、校外の警備をOB会の有志が集まってやりましょうという、それがもう10年以上続いているんですよね。そのときの仲のいいおやじがずっとやってきてお手伝いをしている。今度、若い人たちは、自分たちがまたそういうのをつくれればいいんじゃないの。おやじの会のOB会じゃなくて、その年齢層で、さっき言われた10年差という10年単位で、またそういう面白いものをつくって、いろんな地域ごとにお神輿だとか祭り事、小学校のイベント事、あと、たまたまアドベンチャーin多摩川がありますので、そういうものをお手伝いするという形でやっています。今言われたとおり、せっかく集まったおやじの会の一生懸命やられていた方の受皿として地域にないのは、私はそういう形で今現在やっているんですけども、全てのOBの方が集まってどういうふうにやるかというのは、まだこれからですね。ある程度年代がたって、真剣にそろそろ考えられて、地域の要請じゃないんですけども、地域にとっておやじの会のOBの方の在り方は、これから現役のお父さん方、もしくはOBのお父さん方が考えてつくっていくという形になるかもしれないですね。

○委員 オール世田谷は公費はついているんですか。

○委員 ないですね。

○委員 予算は全然ないんですか。

○委員 ただ、フェスタは、今回だと成城ホールを借りますけど、共催なのでイベントに対する助成金は単発でもらえます。フェスタの場所は公用で借りますし、イベントに対する助成金は申請してもらっています。

○委員 申請というのは、教育委員会からもらえるんですか。

○委員 そうです。

○議長 おやじの会じゃないでしょうけれども、世田谷ではさくらまつりで焼きそばを売って、その上がりで年間の自分たちの活動にするという仕組みをつくっているお父さんたちの集まりがあったりしますよね。

すみません。僕の進行が至らず、50分になってしまったので、一旦これで閉じて全体会に移りたいと思います。委員、皆さん、ありがとうございました。

〔グループB：総合型地域スポーツクラブ〕

○副議長 では、まず委員から、総合型地域スポーツクラブの事例についてお話しいただきます。

○委員 総合型地域スポーツクラブを御存じの方、ちょっとお手を挙げてください。これは沿革を言うと、ちょうど2002年に学校完全週5日制になりましたので、当時は文部省ですけれども、総合型地域スポーツクラブを立ち上げようということで、これが2000年、ちょうど学校5日制に合わせて文科省から出たんですね。実は半田市のスポーツクラブが全国的に有名なんです、その前に、杉並の向陽クラブというのが昭和52年ぐらいから地域のスポーツクラブとして学校プールを中心にして、これも全国的に有名で、この2つがモデルみたいな形で立ち上がったんですね。ただ、向陽は違うんですけれども、半田は完全に文科省がつくったクラブだから、行政主導で、行政から何千万というお金が出て、クラブハウスを造ったりして、それが1つのモデルケースになったんですね。

私は当時、校長をやっていたんですけれども、世田谷区の体育指導委員が50名ぐらいいて、そのまとめ役で会長をやっていたものですから、体育指導委員協議会でもそれを推進しようということで、いろんな地域に根回しをしてかなりやった記憶があります。私も向陽スポーツクラブに体育指導委員として見学に行って、その折に中学校でそういう話が持ち上がっているよということがあって、中学校のキーマンと一緒に見学に行きました。当時、中学校の校長は非常に理解がありまして、その辺も一緒にやろうじゃないかということで、まず向陽スポーツクラブに行きました。

向陽スポーツクラブは、もともと学校プールが空いたので、それを何とか地域で利用できないかということで始まって、当時は総合型なんて名前はつかないんですけれども、文科省がそういうことを立ち上げたということで、2002年に正式に総合型地域スポーツクラブとして立ち上がったという状況です。

それを見本にして中学校でもたまたま全面改築がありまして、学校が全く新しくなったんですね。それで、御存じのように地域開放していますので、それまであった地域のクラブ、各種目のクラブが全部ストップされたわけです。それが、むしろマイナスがプラスになって、新しく何かをつくるという意味では、施設面とソフト面である種のメリットが出てきたので、これがチャンスだということで、校長先生の力が大きかったと思うんですけれども、それと体育指導委員が一緒になりまして立ち上げのスタートを切りました。

実は、その前から中学校を中心にしたPTAのOB・OGが中心になったコミュニティーがもともと10年ぐらい前からあったんですね。何をやってたかという、それはPTAのOB・OG会ですから、子どもたちのために何とかしようというのもあったんですが、はっきり言ってしまえば自分たちで楽しもうということが先で、子どもたちのフリーマー

ケットをやって資金を集めて、地域の何とかウォークをやったり、ハロウィンで子どもたちにプレゼントをしたりで、結果的に地域の子どものための教育に資したということで、言葉は悪いですがけれども、皆さんのわいわいがやがや楽しもうということと、地域の子どものために育てようというのが一緒になっていた。

それが基になったのですが、もう一つ言うと、それが総合型地域スポーツクラブのスタートのマイナス面にも出てきたということが1つあるんです。その辺は後で校長からも、体育指導員からも、キーパーソンからも聞くと、もうコミュニティーがあるから、そんな新しいものは要らないじゃないかという意見が出てきた。地域コミュニティーがしっかりしているから、もうそういうのは面倒くさいやという意見が出てきて、それが足かせになったという話を聞きました。でも、それにめげず、いや、今までのPTAOB・OGの会とは違って、スポーツと文化を主としてやるんだからということで押し切ったというのが実情です。今現在はもう20年もたちましたので、2つの組織は実際にありますけれども、仲よくお互いに協力し合ってやっているというのが、結果オーライだったということがあると思います。

もう20年もたちますので、スタッフもかなり変わっていますし、いろんな新しいクラブもできていますし、そういう意味では、コロナがあつてこの2年間はどこも同じだと思うんですが、総会が書面になったり、あるいはフェスティバルができなかったりで、かなり苦しい状況ではありますけれども、存続をしているという状況です。

あと、「うまくいっている要因」とか「うまくいっていない要因」とか、この要素は、また後でお話しできると思います。

○副議長 ありがとうございます。質問がございましたら、それぞれからまずお願いします。

○委員 組織の構成メンバーはどのようなになっていますか。

○委員 これは文科省でできた1つの組織のモデルはあるんですが、キーマンは会長ですね。会長は地域の重鎮です。会長さんは2代目なんですが、会長、副会長があつて、事務局があつて、これにプラス、クラブマネジャーという結構大きい存在で、いわゆる実動部隊ですね。

○委員 指導員という方ではなくて。

○委員 各クラブの指導員は、また別で、全体のクラブマネジャーという人がいて、いろんな意味でフットワークのいい人がいるんです。大体クラブマネジャーが、キーパーソン

ではないんですけれども、実際に動ける人がいます。どこもそうなんですけれども、クラブマネージャーの存在はかなり大きくて、この人たちが力がないとなかなか動かない。つまり、会長とか副会長は、どちらかというとな名誉職みたいな形で全体統率なんですけれども、それと地域のいろんな人たちをつなぐ役割、ジョインターとありますけれども、そういう意味の人が非常にポイントになってくるように思います。

○委員 これは地域の方なんですか。

○委員 地域の方ですね。実際にはスポーツをやっている。クラブによっては、それがいわゆる体育指導委員であったりします。今は体育指導委員と言わないでスポーツ推進委員に変わったんですけれども、その人たちがやっている。実動部隊ですね。

○委員 スポーツ推進委員というのは、どういう立場の方なんですか。

○委員 行政から委嘱されて、いろんなスポーツをコーディネートしようという委員で、実際のいわゆるスポーツ指導員とは違うんです。推進委員というのは、地域でこういうクラブを立ち上げようとか、あるいはスポーツをやりたいけれども、何をやればいいのか相談に乗るという立場の人がいる。

○委員 そういう方がいるんですね。知らなかったです。そういう方はどこにいますか。各地域にいる。

○委員 所属がスポーツ振興財団で、任命は世田谷区がするんです。スポーツ推進課という組織があって、そこが任命するのですが、活動主体はスポーツ振興財団が事務局になってやっています。

○副議長 ほかの方はいかがですか。この活動が始まったきっかけは中学校の全面改築。そして、そこに校長先生を初めとしてキーマンがいた。社会的にはちょうど文部省（現文科省）がそういうのをつくろうということになっていて、うちでもやろうよというふうに言ったのは、どなたなんですか。

○委員 当時、体育指導委員と校長先生が、ちょうどそういう輪の中に入って、じゃ、やろうじゃないかということでやったということですね。

○副議長 体育指導委員なので、地域の人ですか。

○委員 地域の人ですね。御自身も野球をやって、野球のクラブを立ち上げたいという希望は持っていたということですね。

○副議長 そのときの校長さんも、それで意見が一致して、やろうと。

○委員 そうですね。

○副議長 一方で、東深沢コミュニティーのPTAの人たちが、何でわざわざという対立とまでは言えないですけど。

○委員 そういう反対意見が出たということですね。それが当時は足かせになったけれども、今は非常にいい関係です。

○副議長 今でもこの東深沢コミュニティーはずっと続いているんですね。

○委員 あるんです。

○副議長 PTAのOB・OG会として。その人たちは、ここに書いてあるような指導者とかになったりしているんですか。

○委員 コミュニティーは基本的には指導者じゃないです。コミュニティーは基本的にはスポーツじゃないんですよ。いろんな意味でイベントなんですね。最初、もともとは自分たちのコミュニティーの中でどこかへ行ったりするわけです。けども、結局は学校を基点としてやっているわけだから、やっぱり子どもたちになってくるわけですね。じゃ、子どもたちに何かしてあげようかということでウォークラリーを始めたり、豚汁を作って食べさせたり、そういうふうなことが始まってきたということですね。

○副議長 クラブとの関係でいうと、クラブという名の下で、そういうイベントをやっているという感じなんですか。全く別組織ですか。

○委員 組織は全然別です。ただオーバーラップはしていますよ。同じ人が両方に関わっているということはありません。一般的にコミュニティーは歴史が古いから高齢化しています。

もう一つ付け加えたいのは、これは部活動との兼ね合いが難しいんです。当時は、中学校では部活動が盛んだと施設が全部活動に取られちゃうので、もちろん6時半、7時から開放はありますけれども、地域開放は無理だろうと言われていたんです。そういう意味では、部活動がものすごく盛んな学校は、最初のスタートは中学校はちょっと難しいかもしれない。これが小学校が入ってくるとまた違うんですけれども、結果的には、施設面では東深沢中学校プラス東深沢小学校プラス等々力小学校というふうに広がっていったという実情があります。

ただ、今は問題になっている部活動の外注化という話題が出ていますので、どういうふうにタイアップして協力していくかというのが大きな課題ですね。現在、東深沢中学校のクラブでやっているのは、空手の授業とクラブの指導者が一緒になって、今、東深沢は空手が正課になっているんですね。全員が体育の武道ということで、男子も女子もやって

いるのかな。それが完全に指導者がこのクラブの指導者と同じであるということで、連携している。それから、卓球も指導者が多分同じかと思いますけれども、幾つかそういうふうな形で、部活動とのタイアップは今少しずつ始めているところです。ただ、これから、そういう意味では、その辺が1つの大きな課題になってくるかなと思います。

○副議長 例えば先生方の中に学校の顧問の成り手がなかなかいない場合、専門的に指導できないといったら、やっぱり頼れるようなクラブがあれば頼ることができる。

○委員 そうですね。1つは、部活動の非常に大きなネックは、昼間だということなんですよね。土日の活動がありますけれども、指導者は大体夜の活動が多いんですよ。

○副議長 なかなか平日で夕方からじゃ、ちょっとあれですもんね。

○委員 土日、夜のね。だから、平日で部活動をどれだけ見られるかというのが、ここだけじゃなくて、どこでも非常に大きなネックだと思います。

○副議長 特に部活動との兼ね合いでいうと、そこが問題なんですね。分かりました。

○副議長 クラブのほうは20年間ぐらい続いているということですね。今日の検討事項で、20年間続いている要因は何なのかというところですよ。

○委員 1番は学校の理解でしょうね。特に校長。管理職としての校長、施設の責任者として校長の理解がまず第1番。

○副議長 要するに施設を利用するからということですね。

○委員 そうですね。それからあとは、やっぱり人ですよ。キーパーソンがもちろん必要なんですけれども、キーパーソンがどれだけこういう指導者を集められるか、コーディネートができるかということだと思います。だから、さっき言いましたように体育指導委員がまず最初のキーパーソンになって、それに何人か種目が集まってきて、それをまとめて1つのクラブの組織をつくろうじゃないかということが大きな要因だと思います。

○副議長 現在、それがクラブマネジャーということですか。

○委員 そうです。あとはクラブマネジャーですね。

これはちょっと別な話になりますが、私も今、駒沢小、駒沢中でこまぎわスポーツ・文化クラブが4番目ぐらいにできたんですけれども、私は駒沢小の地域なので、それにも関わったのですが、あれも駒沢小の全面改築のときだったんです。それも1つのチャンスだったんですね。そのときに私が経験したのは、総合型地域スポーツクラブをつくるのに非常に反対されたんです。なぜ反対されたかという、今まで幾つか学校開放で、例えばバレーとか剣道とか、結構活発にやっていたところが、今までの施設の既得権がなくなっ

やうんじゃないか。つまり、今まで何日か取っていたわけですよ。ところが、それをもっと広げてスポーツ総合型になると、みんなに平等に貸さなきゃ駄目になっちゃうんじゃないか。今まであった既得権がなくなっちゃうんじゃないかということで、大反対があったんです。それをまとめたのは、やっぱり校長ですね。当時の校長が、やろうということで、その鶴の一声があって、その英断がすばらしかったですね。

○副議長 そんな面倒くさいんじゃないか、やっぱりやめようという方もいらっしゃると思うんですけど、校長先生の理解にあった背景は何なんですかね。何でその校長先生は理解されたのか。

○委員 やっぱり考え方が民主的だったんですよ。つまり、せっかく新しくなったんだから、一部の人に貸さないで平等に皆さんに貸す。スポーツだけじゃなくて、もう1つは文化というのはあったかもしれないですね。文化的な気持ちを持たれていて、スポーツだけじゃないよ、お花とかお茶とか、そういうものもある。駒沢小学校は別棟にクラブハウスみたいなものがあるんですよ。

○副議長 場所の面で、施設面でということですね。

○委員 道路を挟んでクラブハウスみたいなところがあるので、それもチャンスだったんですよ。だから、これをスポーツだけじゃなくて、ほかのお花とか書道とかいろんなものに貸そうじゃないかという気持ちもあったんじゃないかと思います。

○委員 小学生にとってはお茶、お花に接する機会がなかなかないので、地域の方でやっていただけるといい。

○委員 和室があると、当然それは施設面でもいいですよ。今結構、北沢でも畳の部屋を造ったり、いろんな意味であるんじゃないですか。新しい学校はいろんな施設を造っていますよね。

○副議長 やっぱり場所があることと、それを生かす人がいるということなんですかね。これが20年間ぐらい続いていて、人の継続性というのはどういうふうにつながっているのかというのがすごく気になるんですけど。

○委員 結構若い人が入ってきているんですよ。だんだん組織が大きくなるに従って、若い人も集まってくるんですよ。サッカーとか野球とか、そういう人気スポーツを中心に集まってくるというのがありますね。ですから、どこも組織が老朽化しているというけれども、新陳代謝は新しく回っている感じがするんですよ。それはフェスティバルをやったり、ラジオ体操をやったり、私もスポーツフェスティバルにずっと参加していますけ

れども、若い人たちがサッカーや女子のラグビーとかに来るんですね。

○委員 若い人というのは、お子さんの親世代よりもっと若い人。

○委員 もっとヤングです。

○委員 大学生とか。

○委員 大学生とか、そういう若い人を呼ぶ何かがあるんでしょうね。

○副議長 広報は、こういうのがあるというのをどうやって知っているのか。

○委員 スタッフの中にそういうコネクションがあるんでしょうね。

○副議長 スタッフが、今度こういうのがあるから、来てみない？とか、そういう広がりですか。

○委員 そうそう。例えばサッカーでも、サッカーの指導者が何々高校のサッカー部とつながりがあるとか、高校、大学のサッカー部に来ない？と声をかけてデモンストラーションの試合をやらせたり、そういうことが刺激になっているのかなと思いますね。

○副議長 ある意味ロコミではないですけどね。

○委員 やっぱりロコミですね。

○委員 もともとはスポーツが主なんですか、それとも文化のほうの主ですか。それから、これはものすごい数ですよ。もともとの立ち上げ当時は幾つぐらいだったんですか。

○委員 立ち上げは3分の2。

○委員 それでも3分の2あったのですか。それはすごいですね。

○委員 だんだん増えていって今のになっているんですけどね。

○委員 すごいですね。

○副議長 この3分の2も集めたのは、さっき言ったクラブマネジャー。

○委員 クラブマネジャーですね。あとは体育指導委員という人ですね。

○委員 もともとはスポーツが多かったわけですね。

○委員 そうですね。ただ、文化をやっていこうというのは、そういう発案があって、文化をやりたいという人もいたんだと思います。もともと改築前に施設開放していますから、幾つかはやっていたわけですよ。だから、もともとそういう基礎的なものはあったということです。これが全部新しくできたわけじゃないわけです。もともとあった施設開放のクラブが、そのままこれに移行したということもあります。それからプラスアルファがあったという状況だと思います。

○副議長 これに今後もっと増えていくというのはあり得るんでしょうか。

○委員 今、コロナですから、そういう動きはないですけども、今のところ、多分施設のフルだと思います。

○副議長 もう物理的に限界を迎えている。

○委員 そうですね。増えるとしたら、あとは小学校に膨らませていくかですね。東深沢小学校と等々力小学校。

○委員 会場が小学校とか大学と指定がないところは、基本的に全部東深沢中学校が会場ということですか。

○委員 そうですね。ここに書いてありますけれども、例えばチアダンスクラブは東深沢小学校ですね。合唱が深沢区民センターとか、あるいはテニスは施設がありませんので、近くの東京都市大のキャンパスを借りたりしていますね。

○副議長 基本的にミーティングルームとか校庭とか体育関係は東深沢中学校。

○委員 そうですね。だから、東深沢中学校としては、今のところはこれでもう目いっぱいじゃないかなと思うんですね。これ以上増やしてくると、今後は部活動と競合しますので、基本的には学校教育優先ですから、その空きを使っているという状況ですね。

○委員 それにしても、日曜日結構入っていますから、寄せているんでしょうね。

○副議長 火曜日、金曜日の剣道教室は武道場ですかね。

○委員 卓球と剣道、空手は武道場ですね。

○委員 部活動も今、毎日じゃなくて週2回は休まなきゃいけないとか、先生のためにも、生徒のためにもということなんでしょうけれども、いろいろ制限というかあって、その分、施設は有効に使えるようにはなっているということですかね。

○委員 そうですね。もう一つ大事なことを言い忘れたのですが、最初は文科省（当時文部省）が立ち上げを唱えたわけですが、3500ぐらい全国であるんですよ。そのほとんどかどうかわかりませんが、大体行政からお金が出ているんです。行政の体育課とか財団とかが立ち上げようかということで音頭を取ってあげているんです。世田谷の場合には8つありますけれども、8つが全部そうじゃないけれども、東深沢中学校を先頭に、基本的には地域から立ち上がっている。地域でこういうことをやろうじゃないかといって、結果的にできたのを世田谷区の行政が、それを総合型として認めましょうということになっていて、今、物品助成という形で、お金じゃなくて品物で助成をしているという状況です。それを世田谷型と当時は呼んだんです。行政が立ち上げたんじゃないで地域から立ち上がったのが世田谷型だということで、私は当時の校長の後に行ったんですけども、全国

から、東京都からしょっちゅう視察に来るんですよ。立ち上がった当時は全国的に結構有名だったんです。文科省からも来たし、スポーツ庁からも来たし、東京都のいろんなところからも来て、土日は大体視察対応に出ていたという状況があったんですよ。

つまり、繰り返しますけれども、地域から立ち上がって、それを最終的に行政が認めてくれたということなんですね。東深沢の次が、ようがコミュニティー、その次がしろやまクラブ、こまざわ、烏山ユニオン、尾山台の翠と溪の、それからニチジョは一般社団法人になっていますけれども、日本女子体育大学が中心になっている。この8つあるんですけども、基本的にはみんな世田谷型なんですね。それが大きな特徴かと思います。

○副議長 さっきの東深沢コミュニティーの自分たちで楽しもうじゃないんですけど、やらされている感じゃなくて、やっぱりやりたいからやっているというのが大切なんですかね。

○委員 基本的にはそれがないとね。結局は学校施設を借りて、自分たちで楽しんでいるんです。

○副議長 そういう意味では、今日の検討事項で「持続可能な活動にするために必要なもの」としては、もちろん人なんですけれども、その人たちが楽しんでいないと駄目というか、楽しくないと駄目ということですね。

○委員 やらされている感じゃなくて自分たちからやっているんだということで、それは大きいと思います。

○副議長 場所の面ではどうですか。

○委員 もうフルでしょうね。ただ、あまり膨らんで大きくなり過ぎても維持が難しくなってくるんじゃないか。人数的にも会員が700人ぐらいいるわけで、それ以上になるとなかなか難しいかもしれません。

○副議長 その会員というのは、ここの教室に入っている人全員が会員という感じなんですね。

○委員 全員が会員ですね。会費が年間3000円。高校生以下が1500円とありましたけれども、そのほかに各クラブで会費が取られるわけです。

○委員 ちょっとお聞きしたいのは、学校という施設を使って幾つかのクラブがあって、それは個々の楽しみも含めてやっているわけですよね。ただ、それによって学校側として、うちの学校に総合型のクラブがあってよかったというメリットみたいなものはあるんですか。

○委員 地域がまとまっているから、学校教育にとっては、校長としては非常に力強いですよね。例えば、何か問題があったり、非行も含めていろんな生活指導上のことも含めてあったときに、全部学校の味方になってくれる。地域のそういう人たちの顔がみんなつながっていますから、そういうときには非常に助けてくれる。全面的な応援団ですね。そういう意味では、学校経営者としては非常にいいですね。力強いあれはありました。

○委員 言い方が悪いかもしれないんですけども、外部の方が学校に入るといって、ちょっと不安だという場合もあるかもしれないですよね。そういう心配とか不安は……。

○委員 例の大阪の事件があったときからは、どこの学校もそうですけれども。

○委員 池田小の。

○委員 社会も全部排除したじゃないですか。あのときはちょっとそれはありましたけれども、もともとそういう雰囲気はあるから、そんなに大きなあれはなかったですね。

○委員 そういう地域性がというか、そういう地域だったからこそ立ち上がった、継続できた。

○委員 学校の施設が新しくなったぞ、借りられるぞというのと、みんなで楽しもうじゃないかという、そういう雰囲気は確かにあったんですよね。校長先生の姿勢もあるんですけども、学校によってはあまり入れたがらないという学校もありますか。

○委員 あまりないとは思いますが、一般の教員にとってはメリット、デメリットは分からないでしょうね。教員も長くいることがもうできなくなりましたので、最大で6年となれば、おっしゃるように、知っている人たちがというところが管理職としてはありがたいでしょうね。

○委員 地域の人たちがついてきてくれるという心理的なメリットはかなり大きいですね。

○副議長 学校に対する批判が一つ一つ全部来ますよね。施設を貸すこととか、地域の人が入ってくることに対してどうですか。

○委員 プールも開放していますし、ホールもありますよね。

○委員 ホールがあります。

○委員 もともと施設の的にも恵まれていますよね。

○副議長 そこでやろうとすれば、地域の人で東深沢を見たら羨ましいなという人がいれば立ち上がる可能性もあるような地域ということですかね。

○委員 現実には今、バドミントンとか新体操とかをやっているんですよね。ここまでは

なっていないけれども、うちはほぼ地域に開放で出しているの、知っている人たちという状態にはなっています。それがこういう集団として動いてはいないだけで、それぞれは活動をしている。

○委員 こういうふう組織化するかどうかということですね。

○副議長 そうですね。組織化する意味は何なんだろうという。

○委員 先ほどもちょっと言いましたけれども、使っている人たちは今のままで使えればいいじゃないかという本音はあるんですよ。わざわざ年会費3000円も出して組織化しなくていいじゃないかという意見は、正直言って当然あると思います。

○副議長 もしかしたらほかの中学校区とか小学校区からも入ってきている人もいらっしゃるんですか。

○委員 いると思います。クラシックバレエとかいると思います。親子体操もいるのかな。新体操もいますね。

○委員 新体操はいますよ。多分うちの生徒がいるんじゃないですか。

○委員 かもしれません。子どもたちは、これは結構大きいんですよ。

○委員 そうすると、ちょっと地域を越えて友達関係が、子どもたちも交友が広がったりとか、お母さんたちも知り合いが増えていく。

○委員 それはあると思います。

○委員 地域にないので実感が湧かないんですよ。

○委員 そうですよ。ただ、今も出ましたように、中学校でも施設開放で種目ごとのクラブはあるんですよ。ただ、それが組織化されているかどうかというところだと思います。

○委員 子どもが小さい頃、近くの中学校の体育館でのびのびサークルみたいなので、先生を呼んで、親が代替わりで世話役をやっているということで子どもの体操サークルをやっていましたね。

○委員 ただ、個々のクラブがあって、そのデメリットは、やっぱり組織化されていないと、何かあったときにまとまらないということと、先ほども言いましたけれども、自分たちが使えればいいというので、結構利己的なんです。例えば何かで重なったならば会場が争いになるというようなところがなきにしもあらずで、組織化されていると非常にスムーズに、そういう施設の取り合いにもならない。

○副議長 ある意味調整機能がある。

○委員　そうですね。そして、保険の面でも会費の中で全体保険に入っていますので、何かあったときには保険でカバーできるというのは、大きな事故があったときには、当然その資金も持っていますので。

○委員　普通だとイベントに参加するには個人個人で保険に入ってきてくださいという流れですもんね。

○委員　そういう意味の安心感はあるかもしれないですね。

○委員　中心メンバーだった方がお亡くなりになっても、このバドミントンクラブは続いている。

○委員　この人もマネジャーでキーパーソンだったんです。

○委員　そういう意味では継続性が非常にあるんですね。

○副議長　事務局マネジャー。

○委員　クラブマネジャーとか事務局マネジャーとかいろいろ名称は変えてあるんですけども、いわゆる実動部隊ですね。

○副議長　マネジャーさんは何人ぐらいいるものですか。

○委員　クラブマネジャーは全部入れて五、六人いますね。

○副議長　バドミントンクラブ代表とか、クラブマネジャーさんも活動されている人なんですか。

○委員　そういう人もいますし、もともとクラブマネジャーは全体を見渡す人なんですよ。この人は特にバレーボールをやりたいということです。

○副議長　ほかはいかがですか。

○委員　「活動がうまくいっていない要素」は出てこないんですけども、ただ、中には多分課題もあるんですよ。それこそ先ほど出た、うまくいっていないんじゃないけれども、学校教育活動との連携、タイアップをどうするかという課題と、あとは、やっぱり施設がフル活動でこれ以上大きくできないというのが、「うまくいっていない要因」じゃないけれども、課題ではあるかと思いますね。

○副議長　取りあえず基本的にはあまりうまくいっていない要因が見つからない。

○委員　内情は違うのかもしれないけれども、私を見る限りは、今にところはうまくいっていますよね。

○委員　資金面とかは大丈夫なんですか。

○委員　資金面は全体の3000円、1500円の会費で基本的には動くんですけども、先ほど

言ったように行政からスポーツ振興財団を通じて物品助成が出ています。例えばマットを買うとかはあると聞いています。

○委員 そこは通常のけやきで貸し出されているような施設も、スポーツ振興財団が関わってれば物品の助成がある。

○委員 体育館のモップとかね。

○委員 バレーボールのネットだったり。

○委員 そうですね。

○委員 楽器なんかもそうですね、スポーツ用品を個人とかクラブで買うと結構しますからね。

○委員 各学校に行政からの支援があるんですね。

○委員 そうですね。けやき用の物品はあります。

○委員 特にプールがあつたりすると結構大きいですよ。

○委員 うちの照明とかは手が入らないんです。学校予算になっちゃうので、そういう施設面のものは学校予算だから、例えば体育館の蛍光灯を替えたりとか、そういうのが非常にネックなんですよ。

○委員 財団はやってくれないんですか。

○委員 やらないです。例えば新体操なんか投げる競技がありますよね。割っちゃうんです。割っちゃうと、もうそれで三、四日体育館が使えない。教育活動に影響してくる。しかも、それを10万単位で学校が一時的に払わなきゃいけない。

○委員 入学式、卒業式なんかなきゃだめですもんね。

○委員 そうなんです。だから、中途半端な立ち位置はあまりよくないなといつも思っていて、このお金は一体誰が払うのか。

○委員 そうすると、そういう意味では組織化すると強いですね。

○委員 そうなんです。中途半端なのはよくないなと、今お伺いしながら思いました。

○委員 そういうメリットは確かにありますね。

○副議長 なるほど。ある意味、施設上の予算の面と責任の面ですかね。組織化しないと、全部学校というのは困っちゃいますよね。

○委員 学校の修繕の予算はそんなにないので、特にコロナになっていろいろ出るので、そこで10万単位のものがどんと、昨年度は2回あったんですよ。別に割りたくて割っているわけじゃないけど、これはなかなか効く。

○副議長 人件費とか作業代ですよ。

○委員 その辺を伺いながら、中途半端な活動は少し難があるんだなという実感でしたね。もう今、コロナになってから部活動が盛んというのがなくなってきましたね。あと、お話があった週2回は休みになる。

○委員 そういう意味では、施設的な空きが出てくるという感じで、チャンスはチャンスなんですよ。部活があまり盛ん過ぎると、また難しいんですよ。

○副議長 別の校長先生も同じようなことをおっしゃっていたかもしれない。部活動が盛ん過ぎちゃったら、逆にそれが足かせになるかもしれないというようなことを。そうすると、部活動が強かったら、まさにさっき言った既得権益じゃないですけども、絶対にずっとグラウンドや体育館を使いたいんだから、地域の人が入ってきたら困っちゃうとなりますもんね。

○委員 強くするためには土日に練習試合を組むしかない。そこが使えないとなると、ジプシーのように他校に行くしかないとなっちゃうんですよ。

○委員 文科省が今、部活を外注しようとか地域へということがある。これは部活をあまり盛んにしないように、あまり盛んになっちゃうと、かえって地域連携できないんですよ。だから、週2回休みなさいよとか、日曜日の試合はやめなさいよということになってくると、施設がだんだん空いてくるんですよ。そうすると地域が入ってくる隙ができてくるじゃないですか。そうすると連携がやりやすくなってきます。だから、そういうことを狙っている面もあるかなという、ちょっとうがった見方ですけどね。

○副議長 面白い見方ですね。

○委員 ずっと同じスポーツではなく、様々なスポーツを体験させるという方向性には合いそうかなと思いますね。

○副議長 野球とかサッカーであれば指導も結構担い手がいると思うんですね。マイナースポーツじゃないんですけど、ほかの、例えば新体操とか、なかなか指導者がいない中ではいいかもしれないですね。空手も指導者がたくさんいるわけじゃないですもんね。

○委員 そうですね。オリンピックがあつてちょっと広がってきましたけれどもね。

船橋のぶんか村との比較ですけども、ぶんか村はもともと文化が中心で出た組織ですよ。あそこは、この前お話にあったように、どちらかというと青少年地区委員会が中心になっていましたよね。このスポーツ・文化クラブは、どちらかというと施設的な面では学校が中心で、ソフトの人を組織化する面では地域が中心で、目的はもともとスポーツな

んです。それにスポーツだけでなく文化が入ってきたという形ですので、そういう違いはあるにしろ、地域でキーパーソンがいて、それが組織化されてきたということが、その点では似ているところがあるんですね。

○副議長 継続性も、広報で絶えず若い人が入ってくるというところ、そこは違うところですね。この広報のところは知りたいところですね。どういうふうに口コミで広がっていているんだろう。

○委員 大学とかは近くにあるんですか。

○委員 近くにありますがね。他の大学もありますが今のところあまり接触はないみたいです。指導者として本当はもうちょっと来てもらえればいいんですが、私もいた頃なかなかそれも実現しなかったですね。

○委員 大学の中にボランティアだとか指導に行くという仕組みができていますよね。

○委員 そうかもしれないですね。

○委員 きっとそこも人のつながりですね。

○委員 それのいいところは、多分ですけども、今、学校は私が教員になったときよりはるかにクラス数は減りました。学校にもよるとは思いますけれども、私になったときはA、B、C、D、E、F、G、H組ぐらいまでありましたから、学年に7とか8とかあったと思うんですね。どこもそうではないと思うんですけども、今そんな学校はそうそうない。学年に7、8あれば、恐らく都内でナンバーワンだと思います。となると、1つの部活動にそんなに人数はいないです。今うちでいうと野球部は、合同チームです。ぎりぎりなんですね。9人いれば試合が成立するわけですけども、それぞれで9人そろわないときがあるわけです。

○副議長 合同でもですか。

○委員 ぎりぎり。

○副議長 東京都内だと、皆さん地域のクラブチームとかに行っちゃうんですか。

○委員 そういうのもありますからね。となると、これは学年を超えているんだと思うんですね。だから、いろんな意味で人が心配なく競技できるんだと思うんですね。それを単独で中学だけでやろうとすると、今お話ししたように合同チームか、例えば出られないけれども、修行のように6人でやろうとかかね。ここに行けば……。

○副議長 確実にそれなりにメンバーはそろうし、練習もできる。

○委員 紅白戦をやれることになるんだろうなという気がします。私は見たことがないから分からないけれども、そういうことができちゃうんだと思います。例えば下の学年が上の学年、例えば小学生レベルの子たちが中学生の実態とか、あるいは高校生ぐらいの実態が見えて、あんなになりたいとか、あれ、うまいよねみたいになるのかななんて思ったんです。中学だけでやろうとすると限界のある部分がきっとある。

○副議長 生徒数がこれだけ減ってきていると、そうですね。

○委員 他の中学校も野球部をつくとサッカー部が成り立たないといって、結局、男子バレー部もないので、季節によっていろんな球技ができるように、総合的に球技をやろうということで総合球技部ができました。

○副議長 それはそれで楽しいけれども、本気でやりたい子はいれないですね。

○委員 そうすると、ここで学年を超えていろいろやっているということは、あまりそういう心配がなくてできるのかと思いますよね。

○委員 1つの競技じゃなくていろんなものができるというメリットはありますね。

○委員 いろんなのに入っていらっしゃる方もいらっしゃるんですか。

○委員 それは可能なんですね。例えば、いわゆるスポーツに入って文化に行くとか、それはありますね。昔の部活もスポーツと文化に1つずつ入るケースもありましたけどね。

○副議長 中体連もこういうのも出ていいよと言っていますもんね。なので、もしかしたら学校からお願いするようになりますかね。

○委員 引率の問題もありますけれども、誰が責任を持つんだという、その辺もネックだけれども、こういうふうに責任を持って代表がいて組織化すれば、それは大丈夫。そういう意味ではいいかなと思いますね。現在、757人の会員で、これはサッカーかな。小学生が多いですね。

○委員 年齢制限はあるんですか。

○委員 年齢制限はないと思います。

○委員 幾つの人まででも。

○委員 基本的にはないと思います。上は体が動けば大丈夫なんじゃないですか。下は親子体操がありますから、それは親子で行くから。

○委員 対象は3歳から6歳というのもありますからね。

○委員 書いていないのは、誰が行ってもいいんですか。

○委員 誰が行ってもいいですね。

○委員 年会費の中に75歳以上の高齢者1500円ということは、75歳以上の方がいらっしゃるということですね。

○委員 合唱とかお琴とか書道、その辺はいますね。

○副議長 しかも、テニスは高校生以下無料ってすごいです。

○委員 金額が、この値段で本当に習い事をしようと思うと、地域にこれだけの種類の習い事ができるところはないですもんね。

○副議長 そう考えると本当。

○委員 書道 1 回800円。

○委員 地域のそういうカルチャーセンターとかに行けば万単位ですもんね。安いというメリットがあるかな。

○委員 地域の方が子どもたちもちろん視野に入れて、子どもたちが将来どんなことに興味を持って伸びていくか分からないので、いろんなことができるというのは本当にいいですね。

○委員 私もずっと参加しているけれども、フェスティバルも結構楽しいですよ。

○委員 それぞれのクラブが自分のやっているスポーツとかを体験させてくれるということですね。

○委員 そうなんですね。

○委員 そして遊びコーナーがある。こういうのをやったら新しい人が入ってきますよね。実は私もずっとバレーボールを続けているんですけども、大人になって体を動かそう、スポーツをやろうという機会は、自分で探さないとなかなか見つからないし、1 回始めて、はまるとずっとやり続けられるものなので、これはすごくいい機会だと思います。

○委員 確認をさせていただいていいですか。うまくいっている要因は、学校の理解、校長先生の理解ということと、あとはキーパーソンがどれだけコーディネートできるか。ここでいうと組織のクラブマネージャーという存在があるということ。

順番にいきますと、総合型スポーツクラブは世田谷区で8施設あります。今回は東深沢中を中心とした東深沢スポーツ・文化クラブの例を御紹介させていただきます。現在、クラブ員が757人いるということと、詳しくはこちらのものを読んでいただければということなんですが、立ち上がった経緯は、2000年に週5日制になるに当たり、文科省の声がけがあったということと、中学校の全面改築に伴って、その声がけに校長先生の理解と当時の体育指導委員がやろうという意思のある方がいて立ち上がりました。立ち上げの際には、

既存のコミュニティーがあり、そこから反対の御意見もあったけれども、校長先生の対応によって無事立ち上がった。こういった活動を新しく立ち上げるときには、既存の活動をしているところとの関係性がネック、ポイントになることがあります。組織としては、会長、副会長に加えてクラブマネジャーという実働部隊の存在が大きいです。20年間続いた理由としては、先ほどの学校の理解、特に校長先生の理解が大きく、これは施設利用という面においてかなり大きいということです。

人という面でいうと、キーパーソンがどれだけコーディネートできるか、クラブマネジャーとしてまとめていくという観点からいくと、人の継続性という点でいえば、このクラブマネジャーの声かけなどによって若い方が集まってくる。例で言うと、サッカーなど御自身のやっている活動などを通して関係のある口コミ等々でつながりのある若い人が入ってくるとともに、ここで紹介しているようなスポーツ・文化フェスティバルを開催することによって興味・関心の輪がどんどん広がって行って、そこから新しい人、特に若い人が入ってくるきっかけになっているのではないかということです。

そんなような話等々でよろしいですか。

○副議長 うまくいっていない要因はないと強調しますか。

○委員 うまくいっていないという理由は今のところ見つからないです。

○委員 強いて言えば部活動との兼ね合い。

○委員 それはこれからの課題ですね。

○委員 おかしかったら入れてください。ちょっとそこは後から補足してください。

〔全体〕

○議長 皆さんありがとうございました。今、Aグループでおやじの会、Bグループで総合型地域スポーツクラブを取り上げて、皆さんでディスカッションしていただきました。全体での意見交換ということで、まずAグループから、どんな話合いだったかというのを報告していただきたいと思います。では、お願いします。

○委員 Aグループといたしましては、オール世田谷おやじの会の話伺いました。まず、おやじの会といたしましては、小学校、中学校においてのPTAは基本的にお母様が主体の活動である。おやじの会という団体は、父親が主となって動く団体でありまして、世田谷区には小学校61校、中学校29校で90校の小学校・中学校がございます。その中でオール世田谷として情報交換会をやられておるんですが、情報交換会では約20校のおやじの会が

集まる。ただ、それは固定されていなくて、そのときそのときでいろいろな小学校のおやじの会が参加されているということです。

おやじの会の検討事項についてお話しさせていただきます。

まず、「活動がうまくいっている要因は何か」というお話を先にいただきました。オール世田谷おやじの会と個別の小学校のおやじの会は混同しているのですが、おやじの会としては、個別の小学校の単位でということを中心に話させていただきます。

まず、「うまくいっている要因」は、また、うまく続く要因といたしましては、お父さん一人一人の自主性、やる気があって、自分の発案で物事を考える。人にやらされていない。こういうイベントがあるから、こういうふうにやりなさいじゃなく、一人一人の意見を聞き、皆さんの意見を主として、皆さんと打合せをして物事を進めていく。それがうまくいっている要因である。基本的にはそういう形です。

「うまくいっていない要因」は、去年はこれをやったから今年もこれをやるんだ。あなたはこれをやってください。担当別に最初から閉めてしまう。活動に対して制約がある。こういうものを例年やっているから、こういうことをやりなさい。これがうまくいかない要因であるということをお伺いしました。

「メンバーの入れ替わりや新規メンバーのリクルートについて」ですが、おやじの会をやっていると、私も20年近く前、十五、六年はおやじの会をやらせていただきまして、今ではかなり歴史があるのですが、波がありまして、自分たちがやりたいといって入ってくる年もあれば、何となく廃れていくというんじゃないんですけれども、勧誘がすごく難しい年もあるという話をさせていただきまして、今現在はいかがでしょうかとお聞きしましたら、やはり今現在も学校によってはすごく波があるところもあるということでございました。

「メンバーの入れ替わりや新規メンバーのリクルート」の方法といたしましては、1つのイベント、例えばここで例として運動会といたします。小学校、中学校でテント張りだの何だのイベント事での力仕事としておやじの会がお手伝いをする。また、運動会が終わりまして、子どもたちがはけた段階で、みんなで撤収しましょう、片づけましょうというときに、おやじの会は一生懸命動きますが、ほかのお父さん方に声をかけても、やはり素通りをしてしまう。放送でお父さん方、せっかく子どもたちが頑張ったので、おやじの会と一緒に片づけましょうと言っても、なかなか素通りして入ってこない。そこには完全たる壁があるんです。だけど、委員いわく、翌年にはその壁からこっちに来ているお父さん

がおられる。今度はこっち側になっている。その要因として、「網かけ」をするんだと。いろんなお父さんがたくさんいる。それをみんなで大きな網をかけて、やってみたいと思うんだけど、一歩とどまっているお父さん、何となく踏み出せないようなお父さん方を網かけしてお誘いする。それから、いろんなイベント事を担っているおやじの会がありますよ。そういう話をしながら網をかけていき、なおかつ来ていただいた方には全員へメッセージを送る。また、個別に、「おやじの会としてはあなたが必要なんです」という問いかけにして、言い方は悪いんですけども、引っ張る。一本釣りと言っていましたけれども、網をかけて、その中から一本釣りをして、一歩踏み出したいお父さんが勇気を持ってこっちに来て、なおかつ、あなたが必要だということでリクルートする。そういうことによってメンバーを毎年毎年、必要という言い方は失礼ですが、華やかなというか、活動がしやすいメンバーのお父さん方を入れている。

あと、おやじの会の存在に対しまして、やはりキーマンが必要である。リーダーの人ですね。リーダーになる人は人一倍気を遣われる方、夜遅く子どもたちのためにイベント事を、子どもたちのためになんですが、やはりお父さん方、仲間になる人たちを引っ張り込む。そういう方たちの理解を得て一緒に動きたいということは、そういうキーマンの方がすごく気を遣う方じゃないとできない。なおかつ、そういう方がリーダーになりますと、その姿を見て、どんどん仲間意識ができてきて、我々にもそういう役割を振ってくれ、一緒にやろうじゃないかという形になりますので、すごく思いやりがあってリーダーシップが取れる、また気の利く方が存在するおやじの会はどんどん成長して継続していく。

あと、継続的な活動をするために必要なものは、やはり大人でもドキドキするイベント。子どもたちを第一に考えるのですが、やはり我々大人、おやじが楽しい、ドキドキするものを子どもたちに提供しよう。じゃないと続かないし、やはり子どもたちにおやじの姿を見てもらいたい。ドキドキするイベントをやることによって、おやじたちもすごく楽しくなる。

最後になりましたが、おやじはいろんな職種なんですね。多種多様な職種、多種多様なアイデアが集まる集合体である。その中で自主的に集まり、またリーダーがそういう場をつくって、いろんなおやじたちのアイデアがすごく融合して、子どもたちのため、なおかつ我々大人たちが楽しめ、利害関係のない子どもの世界に大人が戻り、大人たちが楽しむ姿を子どもたちに見せる。それは絶対に子どもたちにとっても安全であり、楽しい思い出になるだろうということが継続可能な活動です。要は、おやじの会というのはおやじたち

が楽しめばいいということですね。

ちょっと乱暴な言い方で雑駁な言い方をしてしまいましたが、継続するおやじの会の大切さ、子どもにとっての大切さ、学校にとって、地域にとっての防災訓練であり、それも含めて大人たち、おやじたちがみんな仲よくなり、いろんなアイデアを出しながら地域にとって、子どもたちにとってやることがおやじの会である。

オール世田谷おやじの会というのは、いろんな学校単位におやじの会がありますが、その1校1校のアイデアの情報交換の場がオール世田谷です。簡単に言いますと、羽田空港から学校までナイトウォークで夜中に歩いた。まず、PTA、学校単位ではできないだろう。だけど、おやじの会が仕切ってやった。それはすごいことである。それはどうやったんですか。どうやって学校を説得したんですか。どうやってお母さん方を説得したんですか。単Pのおやじの会の興味のあるイベント事の情報であり、そのノウハウの情報の場、それがオール世田谷の役割の一つである。

また、おやじと子どもフェスタは子どもたちの発表の場で、ダンスとか吹奏楽というイベントの場を行う。おやじの会の懇親としまして、フットサル、ソフトボール大会を行い、情報交換の場だけではなく、オール世田谷おやじの会としての情報交換と懇親を図るというお話をお聞きしました。

あと何か足すことがあれば、よろしくお願いします。

以上で発表を終わらせていただきます。

○議長 ありがとうございます。補足するようなことはありますでしょうか。

私から少しお話ししますが、おやじの会というのは、イメージ的には各校にあるものをおやじの会ということができる。それに対してオール世田谷おやじの会は、おやじの会のメンバーたちが集う場所である。ただし、単Pに対する世中Pとか、そういうような組織ではどうもないようであるということですね。Aグループの中で出たのは、私のほうで少し意地悪な質問をしたんですけれども、お父さんたちは忙しいし、各学校のおやじの会でもやることはたくさんあるのに、何でオール世田谷おやじの会に行くんだろうか。そうすると、その回答としては、オール世田谷おやじの会にはいろんなノウハウを持った人がいるから、うちの学校はこれができないんだけどといったときに、そこに行って、「こっちではこんなことがあるよ」、「それはいいね。それでやってみようか」というようなノウハウの共有がある。でも、それだけだったら何もオール世田谷おやじの会じゃなくてもいいんじゃないですかと思ったんですけれども、どうも話を伺っていくと、子どもを基点

にしてお父さんたちが集まって、子どもたちにお父さんがここにいるよということを見せたい、あるいは力仕事だったらやれるよ。これはそれぞれの学校のおやじの会に男親が関わってくるきっかけになるということですが、それは昔の時代でもあった。

オール世田谷おやじの会は何が違うんだろうかと、話を伺いながらずっと考えていたんですけれども、会社でも忙しい。もちろん会社でも活躍の場はあるんでしょうけれども、何となく子どもを基点にして学校に関わり出したお父さんたち——これは僕のことなんです、そこに行けばわくわくするようなこと、やりたいと思ったようなことを遠慮なくやれるような関わりのできる非常に珍しい場所としてある。単に承認欲求とか自分の能力を使うとかというんだったら会社でもできるかもしれない。でも、会社にはいろんな職位があって全て自由にはできない。年齢の差があるじゃないですかと言ったら、10歳ぐらいの差は同期みたいなものだ。つまり、小学5年生のお父さんは10歳ぐらいの差があるわけですが、そこで集まった人たちはみんな年が違っても大体同じ世代の子どもの親として何となく仲間意識がある。そういうような出会い方をした人たちが、サッカーだったらこの人が得意じゃないとか、縁日の焼きそばをやるというのはよくあるけれども、射的をやりたいとか、いろんなわくわくするようなやりたいことを、そこでいろんな話をしながら実現できる場。もしかしたら、そういう場は会社とか地域ではない。学校を基点として集まっているけれども、おやじの会に関わっている人たちにとっては、やることのできる空間になっているようなお話を聞きました。

そして、例えば防災ということになると、私の住んでいるマンションでも消火器の使い方とか、地震車が来て地震の揺れを体験みたいなことはあるんですが、消火器の使い方だけをやっても、役に立つかもしれないけれども、それ以上に大事なものは、隣近所の各階にどういう人が住んでいて、あそこにはおじいちゃんがいるとか、何かあったときにはお父さんが帰って来られないけれども、助け合いましょうというか、それぞれの住民が知り合うことなんです。これは私の頭に浮かんだことなんです、おっしゃるには、そんなふうにオール世田谷おやじの会ではお互いを知ること、いろんなイベントを通じて、これだったら彼ができるとか、夜中にいろんな資料を作ってきて、こんな夜中にやってくれたんだな、あいつ頑張っているなみたいな、そういう関わりでお互いを知ることができて、何かをやろうとしたときに、それぞれのできるいろんなアイデアを持ち寄って、機動的に何か新しいことをやっていくような、そういう体験を積み重ねていくことが、個々のおやじの会に帰ったときにもきっと役立つだろう。個々のおやじの会だけでなくオール世田

谷おやじの会で彼とこんなことやってみたいな、時にはばかな話なんかもするらしいのですが、そういうふうなたわいないことをしながらやっていくというのが実現できている組織というか空間のような気がいたしました。

それがほかのPTAとかいろんなところでは、やらなきゃいけないことがあるわけですから、先ほど話していたのですけれども、子どもたちのためにやるというふうに思いが強過ぎると動けなくて、お父さんたちが自分のやりたいことを楽しくやることが、子どもたちのために何かをしようとするときに、学校のために何かしようとするときに大きなパワーになって回転していくんじゃないだろうかというようなお話を先ほどしたところです。

では、もう1つのBグループをお願いいたします。

○委員 Bグループの発表をします。Bグループは総合型地域スポーツクラブということで、今回は東深沢を例として、委員からお話を伺いました。

現在、世田谷区では、この総合型地域スポーツクラブは8施設あります。東深沢スポーツ・文化クラブは、現在、757名の会員がいます。まず、立ち上げに関しては、2000年に学校週5日制になるに当たって、文科省からの声かけがあり、また、東深沢中の全面改築のときと重なったということと、また、当時の校長先生と理解ある体育指導委員の方がやろうよといったキーマンの方がいらっしゃったことで立ち上げる運びになりました。その際に、既存のコミュニティーがあつて、そこの方々がこういったものをわざわざ立ち上げる必要はないんじゃないかというような反対意見もあったそうですが、校長先生の対応によって、無事立ち上がることができたといういきさつがあります。

このスポーツクラブが20年続いた理由としましては、学校の理解、すなわち校長先生の理解があつて施設を利用させていただけるということ、そしてまた、このクラブが組織化しているということがポイントです。組織化の中には人の面として、ここの会報にあるような会長、副会長に加えてクラブマネージャーという実動部隊の方がいて、この方々がジョインターとなってクラブ全体を見たり、ジョインターという役割をして運営しているということが大きなポイントとなっています。

また、組織化しているということはメリットにもなっていて、施設を利用するに当たっての調整機能になっていたり、活動に際しての、事故や何かあったときの保険といったような安全面のセキュリティーのこととか、また、施設を使ったときに破損や何か事故があったときにも対応できるということからも、こういった組織化しているということがメリットとなって20年間続いているのではないかというお話を伺いました。

また、「うまくいっていない理由」としては、思い当たるところが特にないというお話だったのですが、強いて言えば、部活動との兼ね合いが今後の課題ではないかということでした。

「メンバーの入れ替わりや新規メンバーのリクルートについて」は、特にしているというよりは、若い人のほうから集まってきているんだというようなお話がありまして、1つには、クラブマネジャーが活発に活動することによって、そこで知り合った人たち、特に若い人たちが興味を持っていただいたりということで、口コミという形で集まってきているということと、こちらのチラシのようにフェスティバルを開いて、このフェスティバルですごく興味を持った方が入ってきてくれるということから、人の循環はとてもスムーズにできているということでした。

「キーマンの存在」としては、校長先生とクラブマネジャーが、施設面と人の面という意味ではポイントとなっているのではないかというお話でした。

そして最後に「持続可能な活動にするために必要なものは何か」ということだったのですが、組織化しているということのメリットと、参加している人自身が楽しんでいるということ、また、行政主導ではなくて地域の人たちから立ち上がっている活動（世田谷型）ということがとてもメリットになっていて、最終的には参加している人たちが楽しんで、学校や公共の施設を使って、年齢も、それぞれのクラブの活動によって年齢はあるんですけども、基本的にはその中で地域の人が入りたいサークルに入れるということから、多世代の人たちがスポーツ、文化、いろいろなことを地域の中で安い値段、とても入りやすい値段で経験できる安全な参加しやすい場であるということがいいのではないかとまとめてみました。何か補足があったらよろしくお願いします。

○議長 ありがとうございます。Bグループのディスカッションの様子を報告していただきましたが、何か補足はいかがでしょうか。

○委員 うまくまとめていただいて、ありがとうございます。私はおやじの会の報告を聞いていて、共通項は、やらせられてというのではなくて、自主的に自分たちでやるという意識はとても大事なのかな。それから楽しむということが共通していることかなと思って聞いていました。これが地域の1つの輪をつくるためにはとても大事なことで、特に持続可能、長く続くということの1つの大きな要素ではないかと思っていました。

ぶんか村さんは文化というアプローチで最初はやっていますが、スポーツクラブの場合には、最初はスポーツが主としてのアプローチですが、それに文化を入れたという

ことが1つの大きな成功要素かなと思って聞いていました。ありがとうございます。

○議長 ありがとうございます。ほかはいかがですか。

○副議長 うまくまとめてくださったので何も言い分はないのですが、3つの団体に共通しているのは、おっしゃってくださったように、上からではなくて自然発生的に下から、自分たちがやりたい、楽しんでいるというようなところがないと持続可能というのではないんだなというのはつくづく思いました。前回のぶんか村は、最初こそ鶴の一声で始まったとはいっても、その後に続いていった人は、本人が楽しいから集まってきたり、じゃ、やってみようというふうなものがあつたと思うのですが、それと一緒にですね。

あと、組織化する意義もさっきおっしゃってくださったんですけれども、学校施設の貸出しは、もう現にどこの学校でもやっている。それをこういう形で組織化することの意味について話し合えたのはすごくよかったと思います。改めて話し合ったことで、1つはクラブ同士の調整。組織化していなければ、恐らくそこで対立とか変なぎくしゃくした関係が起こってしまうんだけど、組織化すれば、その中でうまく調整して、施設の貸出しとかができるであろう。

あとは責任の所在。何か事故があつたときの保険もクラブとして入れるし、学校側からすると、万が一施設を壊された場合の責任の所在として、現在は学校予算に頼るところが多いようですけれども、そんなときに組織化していれば、そちらから物を壊した部分についても賠償することができるという意味では、なるほど組織化する意味はそこにあるんだというのを話し合えたことはよかったかなと思います。

○委員 もう一つ付け加えるとすれば、学校長としては非常に大きな精神的な応援団になる。何かあつたときには助けてくれるという励みになります。というふうに思っています。

○議長 Aグループだったので、残念ながらBグループの話は聞けなかったのですが、前回の船橋子どもぶんか村と今回の総合型地域スポーツクラブは、何となくのイメージとしては、それぞれの中学校だと、いわゆる部活がありますよね。部活が今、地域との連携を深めましょうとか、場合によっては地域に顧問など活動のある部分を移管しましょうという議論がされていて、いろんな難しい問題とかあると思うのですが、そんなことは話し合われなかったのですが。あるいは今後の見通しみたいなものはいかがでしょう。

○委員 今後の見通しは立たないですね。文科省が言っているのは、土日の地域への移行であるから、平日は学校にかかっているわけで、平日までではないので、そこはある意味線がきちやうんだと思います。現実には、全てがスポーツではないですけれども、例え

ばスポーツで言えば、大体日曜日が大会となれば、そこは教員が引率なのかな。悪い習慣なんですけれども、日曜日に試合があるということは、例えば平日やって、土曜日に練習をしないで日曜日に臨むということはしないんですよ。土曜日に練習して、ずっとやっているわけです。それを誰が面倒を見るの？ 文科省の言うとおりになるかどうかは、大会をどうするかが決まらない限り、例えば受験だとか学校の制度も、大学入試とか、それが決まると、それに向けていろいろ教育課程や試験方法などが変わってきます。それと同じじゃないかなと思うんですよね。相変わらず全国大会があり、都大会があり、区大会をやっていたら、多分変わらないと思います。小学校で一部、例えばバスケットなんかは全国大会で頂点を目指すのをやめてリーグ戦で終わりとか、あるいは柔道はやめたという話も聞きますから、その辺が変わっていくと部活動も変わってくる。今の状態でどうなるかというのは、なかなか見込みが立てられるような話ができる方はいないんじゃないかなと思います。先ほど言ったように、日曜日に大会があったら、教員は土曜日はやるんですよ。となったら、手放していいのか、どうなのか。引率は誰がやるの？ やってくれるの？ という感じになると思います。今は過渡期でしょうね。

○議長 ありがとうございます。この問題の専門家じゃないので、今、特別な何かがあるわけじゃないんですが、ただ、思うのは、現実どうなっているかということですね。そういったことを踏まえて議論をしていかないと、イメージだけでマスコミはいろいろ言いますので、それだけでは解決しないだろう。今、曜日の問題もありましたけれども、総合型地域スポーツクラブは学校のいろいろなものを使って、そこで平日でも、例えば体育館で学校の部活じゃないものをやっているとか、そういうようなことがもう起きている。その中でうまくいかないところや、うまくいっているところとかいろいろあるだろうと思うので、そういったことも含めて考えていかないと、多分うまくいかないだろう。

○委員 総合型スポーツクラブは、結局、学校の教育活動が最優先ですから、その空きを利用しているという形ですので、ほとんど土日と夜の活動なんです。そうすると、大体３－６時、４－６時の間に部活に何人指導者を派遣できるかという問題。部活というのは、今文科省が言っているのは３つ課題があるんですね。先生方の働き方改革、少子化で部が成り立たない、３つ目は指導者をどうするか。この３つが大きな課題だと思うので、それをどう総合型でフォローしていくかというのは大きな課題かなと思います。

○議長 ありがとうございます。今日はそのテーマではないのですが、地域でのいろいろな活動と部活動で問題もあるし、移行期と言われましたが、これから変わっていくかもし

れないし、いろんな意味で具体的な話と一緒に検討していくことができるのかなと思って
おります。たまたまBはそういうようなものをセットしてくださって、Aのほうは子ども
食堂の話とおやじの会と、ある種、組織とか、1つのクラブとかという話とちょっと違う
タイプのものが集まっていたので、そういう意味ではそれぞれいい議論ができたんじゃない
かなと思っております。

ほかに何かありますでしょうか。A、Bについてあれば発言いただいて、なければ次の
日程の話に移りたいと思います。いかがでしょうか。

これはまた活字にして文字起こししていただけるんですかね。

○事務局　そうです。今日御紹介しなかったのですけれども、前回のグループワークのま
とめということで、資料2、資料3という形にさせていただきましたので、また次回も同
じような形で作成させていただきたいと思います。

ついでながら、情報提供ですけれども、令和4年度の区立小学校・中学校のおやじの会
を調査したところ、小学校61校中50校、中学校29校中3校におやじの会があるという結果
になっています。あくまでも区立小中学校という状況です。

○議長　ありがとうございます。A、Bと分けたのは、事務局のほうから、最初は少人
数で話をしたほうが話しやすいんじゃないでしょうかということを提案いただきましたの
で、それでやってみましょうかということにいたしました。分けてしまうと、自分が参加
していないグループのことがよく分からないという欠点はあるのですが、前回そういうふ
うに分けたので、今回1つというのも考えましたけれども、前と同じように2つに分けて
みたということですので、御理解いただければと思います。それぞれのグループの様子に
ついては文字にさせていただきますので、それを見ていただく。今後は全体でということ
をしていこうかな、場合によってはまた分けることもありますけれども、そんなようなこと
を考えながらやらせていただきました。

最後に、今後の進め方ということで、次のこの会議の日程等については何かありますか。

○事務局　次回、皆様に日程調整をさせていただいたところ、10月6日木曜日、同じ18時
半から、こちらの会場、教育会館の「ぎんが」で行わせていただきます。また改めて、追
って11月以降の日程の調整もさせていただきますので、引き続き御協力をよろしくお願い
いたします。

○議長　次回は10月6日木曜日6時半から、またここということですので、皆さん御予定
いただきたいと思います。よろしいですか。

ということで、ちょうど時間も半になりました。そのほか特になければ、以上で本日の会議を終了としたいと思います。ありがとうございました。